

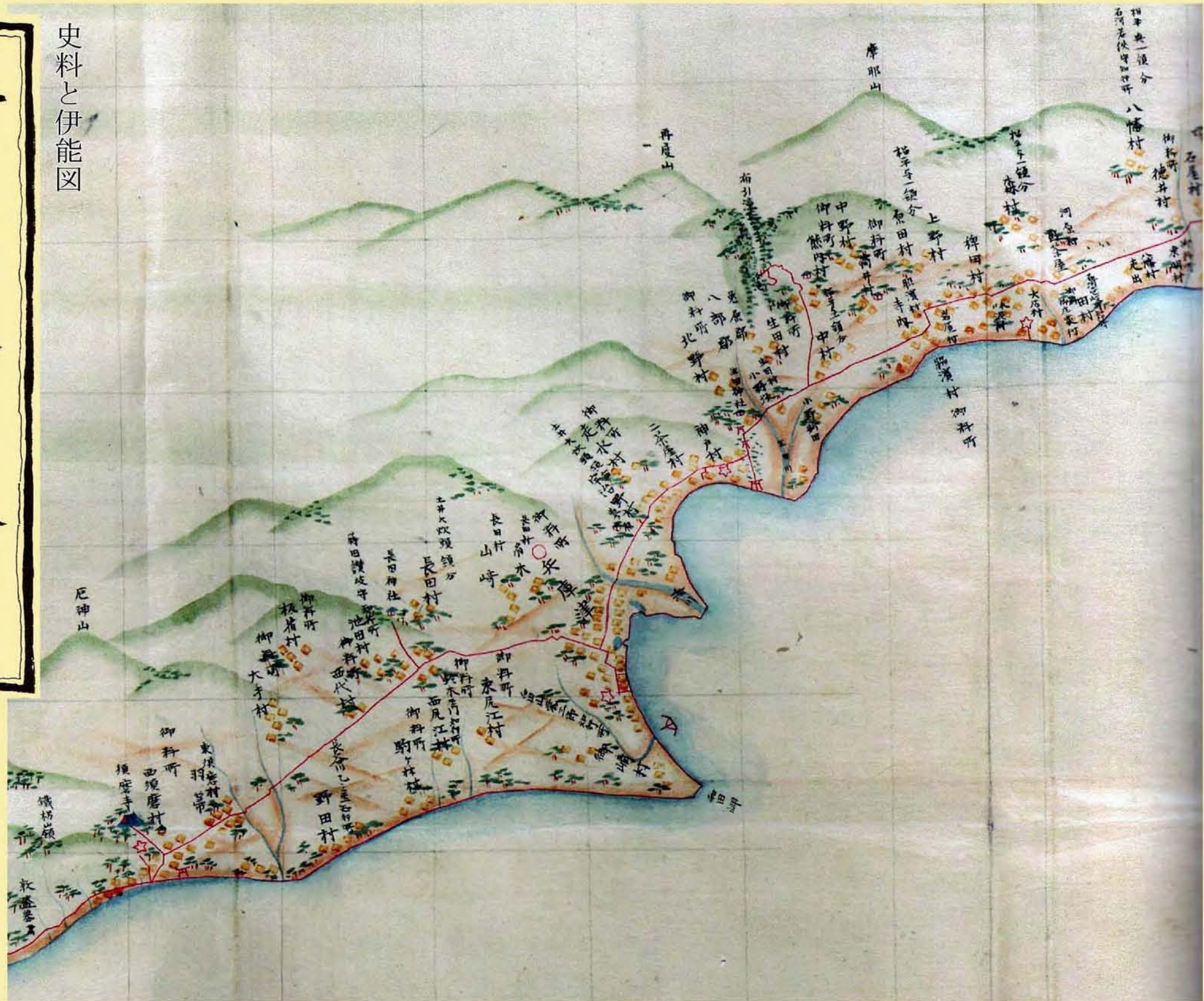


史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇一一年 第六二号



伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS
No.62 2011

山陽道の攝津国武庫郡から播磨国明石郡、および淡路島の北部を描く第137号の、神戸・兵庫付近である。137号は、この図のほかに国立歴史民俗博物館、海上保安庁海洋情報部にも模写本がある。議会図書館所蔵大図のなかでは数少ない彩色図で、本誌カラー化の最初を飾るにふさわしい。測線、記号の朱、山の緑、海、川の藍、砂浜の黄などが鮮やかである。本来は墨の小さい屋根形の連なりで示される村の家並みが本図では黄色の枠付長方形となっているのが特色、東隣りの第138号大坂も同じ様式である。

神戸、兵庫、西須磨と天測の☆印が続くが、兵庫、西須磨は文化二年（一八〇五）の第五次、神戸は文化六年の第七次測量の際の測量である。第五次では海岸を、第七次で街道を測っている。第五次（畿内・中国）では二つの小班がそれぞれ摩耶山に登り、山頂から山々を測ったという。山頂へのルートの測量はしていないので測線はなく、大図をみただけではこの山に登ったことは気づかない。日記を読むことで知ることのできる事実である。後年（天保年間）、津藩の学者齊藤拙堂は、山道は大変な急坂だが、山上の天上寺の境内からは大坂湾とそれを囲む山々が一望でき、紀州と阿波の間から極まりない海（太平洋）に続いているといった紀行文を残している。忠敬たちは生田神宮、布引滝にも立ち寄ったとあり、この滝には測線が延びている。だが、これはこの時ではなく第七次の測線だ。摩耶山のあと、楠公ノ碑の前でその位置を図に記すため山々を測ったとするが、この模写本には碑の記載はない。日記から神戸―兵庫、なかでも兵庫の股賑ぶりが伝わる。また、一帯は名所、旧跡が目白押しで日記も賑やかである。

鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次

62号

話題

- 特報 伊能図とともに幕府へ上呈した『輿地実録』正本を確認

鈴木 純子 1

- 伊能測量現地史料紹介①

尾鷲大庄屋土井家文書（一）

―よく揃った測量関係の村方文書として―

伊藤 栄子・渡辺 一郎 5

- コラム 忠敬さんの印鑑調べ

渡辺 一郎 11

- 伊能測量現地史料紹介②

第四次隊、中能登を行く（一）

加賀藩十村真館四郎大夫「覚書」より 河崎 倫代 12

- 伊能測量現地史料紹介③

唐津、伊万里辺の忠敬の先触れと村方記録

渡辺 一郎 18

研究ノート

- 忠敬と大雄山最乗寺・道了講

大沼 晃 25

- 研究レポート『伊能忠敬』（十二）

忠敬の見た風景（その六）

石谷 春香 29

- 各地のニュース・お知らせ

理事会報告・伊能忠敬史跡紹介・会員便り・測量日記DVD発売ほか

表紙図解説 鈴木純子

編集部 33

伊能図とともに幕府に上呈した

『輿地実測録』正本を確認

鈴木純子

一 はじめに

国立公文書館には『輿地実測録』の手書本三セットが収蔵されていることが知られている。この三セットのそれぞれについて、昨二〇一〇年六月に、渡辺一郎名誉代表と筆者で、比較調査をおこなった。その概要は『伊能忠敬の地図をよむ 増補改訂版』（河出書房新社による）に記したが、詳細を本誌で報告する。

伊能忠敬の全国測量の成果の総まとめとして、文政四年（一八二二）に上呈された「最終上呈伊能図」の正本は、明治六年（一八七三）の皇居火災で焼失してしまい、今は見ることができない。このことは広く知られているが、地図と合わせて上呈された『輿地実測録』の正本、十四冊一舗は、現在も国立公文書館に保存されている。皇居火災の時、最終上呈図は地誌・地図編纂用の資料として、当時皇居内にあった太政官正院が借り出しており、そこで火災にあったのだが、その時正院が借り出していたのは地図のみで、借り出されることなくそのまま紅葉山書庫に収蔵されていた実測録は無事生き残ったということである。これについては、江戸幕府の命により編さんされた諸資料の解説目録である『江戸幕府編纂物』（福井 一九八三）の「大日本沿海輿地全図」の項に記載されている。辛うじて現代に伝わる上呈本の片り

んとして貴重な資料であるが、これまでこの記事で知るのみで実物に接する機会がなかったため、ぜひ実物にあたってみたいと考えた次第である。





地図接成便覧（『伊能忠敬の地図を読む』河出書房新社より）

二 『奥地実測録』とは

『奥地実測録』とは伊能図、すなわち『大日本沿海輿地全図』とともに上呈された測量のデータ集である。首巻および、一十三巻の計十四巻で、首巻には高橋景保による大日本沿海輿地全図序、伊能忠敬による序および凡例（執筆は久保木清淵によるとされる・いずれも文政四年夏六月の年記をもつ）、さらに景保又誌として測量隊員名と測量事業の顕彰、以下、全巻の総目録を収録する。一十三巻は街道、沿海、嶋嶼、湖沼、蝦夷の順に、それぞれ地方別に順次、各測量地点について、隣接地点との距離、緯度を記載する。加えて、大図二一四図各図の接合関係を示す一覧図である「地図接成便覧」（折りたたみ一鋪）が付属資料としてそえられていた。

三 国立公文書館所蔵の『奥地実測録』三セットについて

福井（前掲書）の記述を参考にしたつ、実見した結果はつぎのようなものであった。

最初に述べたとおり、国立公文書館には上呈本を含む『奥地実測録』写本が三セット所蔵されている。そのうち、函架番号177-920（以後Aとする）の一セットが上呈本であることは、すでに福井によって報告されている。ほかの二セットの函架番号はそれぞれ、177-919（全十四冊）（以後B）、177-922（全十四冊）（以後C）である。この二セットとも対比しながら、上呈本をあらためて検証した。

A・B・Cを比べると、一見したところでは、黄色、紗綾（さや）型押の紙表紙に「奥地実測録」という題簽、袋とじ、大きさなどの装丁、また、記載内容、黒界九行の罫紙（木版）に楷書の手書きという点は三種とも同じである。

ただし、テキスト部分がほぼ同じであるのに対し、Aにかぎって十四冊の「実測録」のほかに、「地図接成便覧」一冊がそえられている点が特筆される。実測録の冊子と同じ大きさに折りたたみ、同じ表紙がつけられて、一緒に保管されている（請求記号同一）。また、Aの帙題簽には「楓山本」と付記されている。BとCは冊子のみで接成便覧はついていない。実測録に付録として接成便覧がそえられていたことは、紅葉山文庫の『元治増補御書籍目録』により確認できる（福井前掲書）が、現存が知られているのはこの一点のみである。

三種とも精写ではあるが、Aは筆跡もよく罫紙の黒界の刷りも鮮明である。福井氏は「高雅清明な美本」としている。B、Cにはわずかながら誤写あるいは誤写の訂正がみられる。すなわち、Cには朱筆なしいし付箋で誤写が指摘されている箇所があり、その部分がBでは誤とされている文字、Aでは正とされている文字になっているという関係がみられ、ミスがないとみられるAは上呈本というにふさわしい（右下表参照）。

また、川の三本目の下端にみられる内側へのハネ、図と圖など文字

A	B	C
畫	盡	盡 恐 畫 誤 (付箋)
麥	麥	麥 → 麥 (朱で訂正)

の用例は、A・Cに共通部分が顕著、Bとの間には違いがみられる。A・Cでは、Bにはない異体字の使用も見つかっている、などの違いがある。

四 蔵書印と資料の由来

Aには「秘閣圖書之章」という朱の角印がある。この印記はAが紅葉山文庫本、つまり上呈本であることを示すものである。これは維新後、太政官正院歴史課が旧幕府紅葉山文庫本を管理していた明治

五年以降に作られた数種の蔵書印のひとつで、紅葉山文庫本には全てこの印が押印された。幕府時代の紅葉山文庫では蔵書印が用いられていなかったため、この秘閣印（大の新田二種・小一種の三種ある）は、紅葉山文庫本であることを確認する有力な手がかりとされている（内閣文庫 一九八二）「ただし、稀にその他の資料にも押印例があるという」。『大日本沿海輿地全図』と『奥地実測録』の紅葉山文庫への入庫は『御書物方日記』文政四年（一八二二）十一月十三日の条に記録されている。この資料がひき続き幕末まで収蔵されていたことは、『元治増補御書籍目録』中の「御家部」に、「実測輿地全図 大図 三

〇軸 伊能忠敬等撰／同 中図 二軸 同 小図 一軸 同／奥地実測録 一三巻首一卷・附接成便覧一張 一四冊 同上（〇は改行）と記載されていることから確認できる。今回は同じく国立公文書館に収蔵されているこの日記も確認した。地理類として、国絵図などと共に記載されている。内容は福井の記録どおりだが、目録では「中図二軸」という部分が重複記載されている。元治の御書目増補は元治二年（慶

応元年（一八六五）に実施された。幕末の記録に残る上呈本がAであることは、押印された印記からも確かめられる。

残る二セットのうち、Bには「昌平坂学問所」「大学蔵書」（朱）、

Cには「地誌備用圖籍之記」「図書

局文庫」（朱）の印記がある。ほかに「日本政府図書」印が三セットに

共通して押印されている。昌平坂学問所の印記はその本も献上本であることを示しているという（福井 前掲書）。

学問所印のあるBは、同じ印記を持つ東京国立博物館小図三舗とともに、文政五年（一八二二）五月に高橋景保が献納したもの（佐々木 二〇〇三）、地誌備用圖籍印は内務省地理局の地誌資料に用いられた印記である。地理局へは伊能家からの副本献納の際に「輿地実測録」・「接成便覧」も献納されたことが明治五年一月の測量司による伊能源六宛の借用書（世田谷伊能家資料・現伊能忠敬記念館蔵 註1）にも残っているが、便覧を欠く本資料が副本来のものかどうかは今のところ確認できていない。

以上みてきたとおり、国立公文書館所蔵の三点のうちAが上呈本であることは相互の比較を通じて確かである。ただ、上呈本の姿を伝え



紅葉山文庫旧蔵本であることを示す「秘閣圖書之章」印

る「要記」（大谷引用・では、実測録について「輿地実測録十四卷内一卷序目凡例 七百一十七枚 美濃紙黒界本 標紙紅蒲色サヤカタ打出 白練糸小口以浅黄裏之函入標題如本題」としており、現存資料の

表紙の色は同時代の記録と一致せず、前記の「増補書目」では確認できる接成便覧についても記されていない。函も現在に残っており、上呈本は首巻（序目凡例）・第一〜六巻と、第七〜十三巻・地図接成便覧が後補の無双帙二帙に収められている。

なお、明治三年（一八七〇）、大南学校刊の『大日本沿海実測録』は当時大学別当兼侍読であった元福井藩主松平慶永（春嶽）所蔵本を底本としており、上呈本とは本文に異同があるという（福井 前掲書）。

註1 伊能家副本は明治五年に工部省測量司に貸し出され、同六年五月の皇居火災後に、献納への切り替えがおこなわれた。

参考文献

福井 保 一九八三 『江戸幕府編纂物』

「解説編」 雄松堂出版

内閣文庫 一九八一 『内閣文庫蔵書印

譜 増補改訂版』 国立公文書館

佐々木利和 二〇〇三 『浅草文庫献納書目』（解説・別に図版あり）『伊能

忠敬と日本図 江戸開府400年記念特別展』（図録） 東京国立博物館

（すずき じゅんこ）

尾鷲大庄屋土井家文書(一)

―よく揃った測量関係の村方文書として―

伊藤 栄子

渡辺 一郎

本文書は、三重県尾鷲町の大庄屋土井徳蔵が自分用に作成した、第五次測量途中の通達類の写しである。通達は刻付けの廻状で廻され、村々には必要に応じて内容を書き写して次の村（または宿場）に送った。

土井家の控えは、幕府事業となつてから、伊能測量に関し村方が受け取った通達類一式が整っている。個別内容を報告したい。各地の旧家には、同種の少しづつ違う古文書が沢山残されている筈である。

これらに対比することにより、伊能測量の現場風景の細部が浮き上がることを期待している。収集・報告をお待ちしたい。なお、本稿の解説は伊藤栄子が担当した。

文化二年丑四月

公儀御役人衆上下拾四人、此度測量為御用諸国巡道通行被成候二付、右取扱控
土井徳蔵

御証文写

三通

御証文とは、公用旅行者に対し、老中、勘定奉行、所司代などが発

行し、道中無料で旅行用人馬の提供を受けられる証書である。利用できる人馬の数量が記載されている。発行者の采女は、老中の大垣城主・戸田采女正である。

御証文は大切なもので、旅行中は御証文箱に収められて、身近に持ち運ばれ、宿では床の間の三方の上に置かれた。

出発に先立って御証文を受け取ると、忠敬は写しを作り、旅行予定にしたがって先触れを認めて、一緒に伝馬町の伝馬役に伝達を依頼する。伝馬役は自身の添え触れを書き、宿場に宿継ぎで伝達を指示した。

第一番目の宿場では通例、御証文写の更に写をとって、写し本文は封印して持ちまわった。村々は写しの写しを見て控えをとった。

覚

一人足六人

一馬壺足

一長持壺棹

右は測量為御用測器類從江戸、東海道中国筋、四国九州壺岐対馬、隠岐淡路海辺廻り浦歸路は、中山道甲州街道往返共、伊能勘解由断次第御用中幾度も可持送者也

丑二月 采女

右村宿中

右は測量機器運搬用の人馬利用を許可する御証文である。コースは漠としているが、あとで勘定奉行の先触れでは具体的に経路がしめされている。宛先は遙か左下の右村宿中。村や宿の年寄は老中から遙か目下な為である。

人足壺人馬五疋、從江戸東海道中国筋、四国九州壺岐対馬、隱岐淡路海辺廻浦、帰路は中山道甲州街道往返共、測量御用二付天文方高橋作左衛門手附伊能勘解由、作左衛門弟高橋善助、天文方下役市野金助、坂部貞兵衛罷越付、壺人式疋勘ヶ由、壺疋充、善助、金助、貞兵衛へ相渡之者也

文化二 丑二月 采女

右村宿中

個人の旅行用品運搬用人馬の利用を認める証文である。忠敬は馬二匹人足一人、他の三人は馬一匹あてである。隊員の内弟子には手当ては付いたが馬は無かった。忠敬の二匹目は内弟子共用分か。

伊能勘ヶ由儀為測量御用、東海道より中国筋四国九州壺岐対馬、隱岐淡路迄海辺浦々罷通り、帰路は中山道甲州街道往返共、於途中も測量可致間、其先キ々ニ而差支無之様致し、尤地方通行難成所ハ其所より船を出し、案内致し無指支様可致者也

文化二 丑二月 采女

宿々

村々年寄共

伊能隊が行くからよろしく。陸路通行が難しかったら船を出して案内するように、と命じている。この通達を拡大解釈すると何でもしてあげるように、となるが、事実そのようになされた場所が多い。村・宿場の一同に宛てた前二つの通達と宛先がかわり、年寄共として、村役人に宛てられている。村の幹部によきに計らえという意味であらうか。

御勘定御奉行様

急

上包紙二 御触書

急

中包紙 触書

追而此触書早々相廻し承知之旨、別紙請書相添留りより左近役所へ可相返候

一人足壺人馬式疋

伊能勘解由

一 馬壺疋宛

高橋善助 下役式人

右之外測量持運

一人足六人

一 馬壺疋

一 長持壺棹持人

右者此度東海道其外西国並中国筋海辺浦々測量為御用被差遣二付、書面之通無賃之人馬被下候間、宿々村々おゐて其旨相心得、往返共無滞可差出者也

退出

兵庫

和泉 印

割印 丑二月廿四日

左近 印

煩

飛驒

主膳 印

退出

美濃

この先触れは勘定奉行から沿道の宿々、村々に宛てたものである。前三通の御証文は伊能忠敬が発した先触れに写として添付されたと思われるが、勘定奉行先触れは、後の記録から写しではなく、本紙が同時に直接継ぎ送られたと考えられる。

長持ちに持人の文言が追加されている。発行日の二四日は伊能隊出

発の前日である。以下に当初計画された具体的な経路がしめされる。

江戸を出発した測量隊は、東海道から紀伊半島を巡り、大坂から京都に出て、山陰を下関まで進む。山陽道沿岸を舞子まで戻って四国の阿波に渡り、土佐、愛媛を測って豊後から大隈、薩摩に至る。

薩摩から天草を含め九州を北上して肥後、肥前、彦岐、対馬、北九州を測って伊予、讃岐を経て大坂に戻る。大坂から草津を経て東海道を名古屋に戻り、中山道を通り新宿に帰る。という大計画だった。

三年くらいかけて、西日本を一挙に測ろうという予定だったが、実際には、そうはいかず、五回に分割されて、約十一年を要することになった。この先触れを受け取った方も破天荒な計画にビックリしたに違いない。

御用	先触	覚	御証文
			一人足七人
			同
			一 馬六疋
			同
			一 長持袴持人足
			右は我等儀西国筋国々海辺、為測量御用明廿五日朝六つ時、内弟子共上下拾四人江戸出立、東海道品川宿より御用相始、尾州佐屋通り大宝新田、夫より勢州桑名海辺従ひ、勢州志州紀州泉州摂州大坂迄致通行候間、御証文之通書面之人馬無遅滞継立、且勢州志州紀州泉州海辺、小島有之場所又ハ海岸通行難致場所ハ、其渡り口ニ船用意

可有之候其外川越渡船場ハ、前宿申合、且止宿等之儀差支無之様致し、尤右通行筋山川共致測量候間、村送り二案内可有之候			
一 泊宿之儀、雨天其外逗留之儀も有之候間、途中より追々可達候			
尤御測器据込候間、明キ地十坪計之地所用意可有之候 尤泊宿二而夜分致測量候間、可成丈ケ上下不残同宿之積り用意可有之、尤海辺村方建家間狭二而、何様二も同宿難成儀も候ハ、近辺へ別宿用意可有之候 且其所之勝手二より寺院二止宿候而も不苦候			
支度之儀ハ御定之木銭米代相払候間、其所有合之品二一汁一菜之外、決而為無用候			
則御証文写三通差遣候 此先触早々致順達、我等大坂着之節宿所へ可相達候 勿論大坂より先キ之儀ハ 大坂表へ着之上、同所より先触可指出等二候以上			
二月廿四日	坂部貞兵衛 印	市野金助 印	高橋善助 印
			伊能勘解由 印
			江戸伝馬町
			東海道筋
			品川宿より桑名迄
			海辺
勢州 志州 紀州 泉州 摂州大坂まで			右国々 宿々村々
			問屋
			名主
			年寄
			中

伊能忠敬自身の先触れである。老中のお証文の写しを添付し、具体的な要請を記している。変更もありうる。夜間天体観測用の場所の用意を願いたい。なるべく宿は一軒にして欲しい。寺院でも構わない。宿泊料はお定めの木銭、米代を支払う。一汁一菜のほか馳走をしないように、と述べる。とりあえず大坂まで流された。

受けた村々は、刻付けの廻状なので、昼夜を問わず、控えを取って次の村に伝達しなければならない。書類は大工道具箱のような頑丈な木箱に収納され、複数の人足がかついで走った。一人が倒れたら代わりがみつぐ。伊能隊は部隊であり、命令は軍令と考えれば納得できる。この先触れは予告で、実際には、宿泊日程を確定した泊付けの先触れが、さらに一ヶ月分くらいごとに流された。

江戸南伝馬町 高野新右衛門	<p>添触</p> <p>覚</p> <p>一御証文写 三通 壺包</p> <p>一御先触 壺包</p> <p>一休泊御書付 壺通</p> <p>箱入</p> <p>右は此度測量為御用、御役人中明廿五日江戸御出立被成候間、則差越申候 御書面之通用意可有之候 尤宿村無滞候様可被相触候</p> <p>以上</p> <p>御伝馬役 高野新右衛門印</p> <p>品川宿より御用先々 宿村</p> <p>丑二月廿四日</p>
------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>問屋 中 名主</p> <p>江戸南伝馬町 高野新右衛門</p> <p>添触</p> <p>覚</p> <p>一御勘定奉行様御連印 御触書壺通</p> <p>右ハ此度測量為御用、御役人中江戸御出立二付、被成御渡候間則差越申候 尤御触書之内削三ヶ所、其外墨付よこれ無之候間、宿村大切拝見之上早々継送り可被申候以上</p> <p>丑二月廿四日</p> <p>御伝馬役 高野新右衛門 印</p> <p>品川宿より御用先々宿村</p> <p>問屋 名主 中</p>	<p>忠敬先触れと、全ルートを順達したと思われる勘定奉行先触れの添え状である。最初の休泊予定も含まれていた。</p> <p>急御用</p> <p>廻状</p> <p>神奈川宿より先々</p> <p>川崎宿問屋</p> <p>以廻状得御意候 然ハ此度御通行被成候測量御用伊能勘解由様 御証文人馬之外人足四人、測量御道具持人足入用二御座候然ル処、今日品川宿よりは問之村繼二て参り候得共、夫二而ハ所々二人足入</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

替り御用并し兼候二付、右人足当宿より宿繼にて差出くれ候様被仰聞候 尤此段当宿より以廻状、先々江申通候様二と御座候間此段申進候左様御心得可被成候、以上

丑二月廿五日

川崎宿問屋

藤右衛門 印

神奈川宿より

先々御問屋中様

川崎宿からの急廻状である。御証文の外に測量道具の持ち人足四人が必要になった。品川宿では四人を途中の村継ぎで出してくれたが、それでは作業が不便なので、川崎からは宿場人足を使う宿継ぎにして欲しいといわれました。そして先々にも伝えて欲しいとのことなので、お知らせします。という廻状である。

問題は二つある。まず出発草々、御証文の枠を超えた人足の利用である。老中証文の三通目の趣旨からみれば、仕方がない範囲かも知れない。しかし、これを先々の宿に伝えよ、というのはどうだろうか。地元の善意で協力ならいいが、最初から許可された枠を無視して指示を出すのはいかがなものかと感じる。

尾鷲では下役独断の指示が大問題となり、市野金助が離隊するのだが、第五次測量では最初からその萌芽があつたように思われる記録である。忠敬が知らないところで、下役の指示で扱われたのではなからうか。宿場側では、これだけの体制で出発した測量隊の命令には従うしかなかったらう。

一、御勘定奉行様御連印御触書、測量御用御役人中様御触書 右之通丑二月廿八日申中刻、江尻宿より奉受取候所、安部川満水通路無之候二付、御留置今廿九日辰中刻 安部川口明キ候二付、即刻丸

子へ御継送り申候 以上

丑二月廿九日

府中宿問屋

太兵衛 印

大井川満水夜越難成断書 式通

天竜川同断夜越難成断書 式通

右天竜川端三月朔日御泊り二成ル

ノ五通

大井川、天竜川が川止めで、先触れ、廻状の伝達が遅れた理由書である。刻付けなので、通送が遅れたときは理由書が必要だったようである。

汚れの断り書きもある。届いたときは汚れていたよ、という言い訳か。このような文言も写しがとられたことに驚く。

墨付

よこれ断書 壺通

同 壺通

志州堅神村

庄屋深江 印

見付宿 問屋 印

文化二乙丑年

東海道中国四国九州迄、宿々村々海辺浦々御請印形帳

二月廿四日

東海道 品川宿

一人足壺人 馬式足

伊能勘解由様

一馬 壺足宛

高橋善助様 御下役式人

右之外測量器二てハ無之候持運

一人足六人 馬壺足

一 御長持壺棹持人

右は此度東海道其外西国並中国筋、海辺浦々測量為御用御越被成候
二付、書面之無賃人馬被為下置候間、宿々村々ニおゐて其旨相心得、
往返共無滞御繼立可仕旨、御触書拝見奉畏候依之御請印形奉差上候

以上

文化二年

丑二月二五日

段々請印致有之候

問屋 年寄 庄屋 中

ほかの測量記録を読むと、判取り帳は最初の宿場で作られた。お触
れの内容はこのように膨大なものだった。

覚

一 御証文写三通

壺包

但し上二墨付汚有之候

一 御勘定奉行様御触書 壺通

但し播州之州之字二墨付有之候

一 測量方御触 壺通

一 御伝馬役添書 式通

一 御受印帳 壺冊

一 川崎問屋廻状 壺通

一 川留書付 五通

一 墨付断書 式通

八品 白木箱入 外二村々送書 壺包

右之通大曾根浦より請取候二付持送り候 改御受取刻付ヲ以 早々
順達可被成候 以上

丑四月十四日 行野浦、矢ノ浜村兼帯庄屋佐蔵 印

九木浦庄屋

仁右衛門殿

行野浦から九木浦への送り状である。お証文箱は大きな木箱だった
らしいが、各宿の送り状は皆中に入っていた。刻付きは至急扱いで、
昼夜を問わず、継ぎ送る必要があった。夜なら人足当番を複数人叩き
おこして、担いで走らせた。担ぎ人が倒れても、他の者が代わって通
送した。

急御用廻状

吉田船町

測量御用

廻状

此間先触順達仕候天文方伊能勘解由様御通行之由、海辺付村々、一
昨年測量相済候二付、此度は東海道筋御通行被遊候段、白須賀宿よ
り申参候二付、為御知申上度海辺二無御座候間、何角御心遣不及申
候

一 御先触之儀白須賀宿より海辺付へ継立候段、大二不調法二相成候
先々御指支二相成候得は、猶々不調法二相成候間、此廻状早々御
順達御先触二追付候ハ、右之段御承知之上御先触御写置並二拝見
迄も不及候間、早々熱田宿迄御繼立可被成候 延引二相成御指支二
相成候而ハ、浦継村々迄も少々不調法二も相成可申哉と奉存候 早
々御順達可被下候 以上

丑三月廿八日 午上刻

船町庄屋

九郎左衛門印

下地村より先々海辺付熱田宿迄

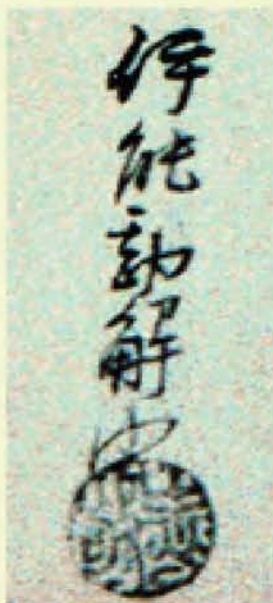


世田谷伊能家旧蔵。現在伊能忠敬記念館蔵の遺書と思われる書類である。黒印が押してある。第8次測量に先だって記された。

忠敬さんの印鑑調べ

問屋
年寄 中
庄屋

尾鷲浦が写す必要のない廻状である。第四次測量で海岸線を熱田まで測ったので、今度は東海道を計るよといっているのに、白須賀村が海岸の村を継ぎ送ったので、間違いだからと修正のための廻状だった。(いとう えいこ・わたなべ いちろう)



東北支部長の松宮さんからあるところで忠敬の書が発見された。印鑑があるので、検証のため、忠敬の印鑑を探して欲しいと言われたが、これがなかなか難しいのである。

だいぶ以前に紹介したことがある「大切な書き物」と表題がある第八次測量出発前に書かれた遺書(?)とおぼしき書きもの(上左写真)と、津軽家旧蔵の沿海小図(右写真)に印があることを承知していたので、探してみた。カラー版の特徴をいかし、今後のために紹介しておく。

上は上記印鑑の拡大図である。忠敬先生の署名はなかなか達筆である。右の津軽家旧蔵の沿海小図は傷みが激しいが、針穴本で、押印がある伊能図はこれだけと思われる。(渡辺)



国立国文学研究資料館蔵(津軽家旧蔵)の沿海小図凡例に見られる押印。この凡例は、文化元年小図の凡例の中では、最も達筆ではないかと考えている。国立国文学研究資料館蔵にはこのほか、沿海中図3枚揃いも所蔵するが、傷みが激しいので、実物は見学不可。ダイレクトプリントの写真しか見られない。

第四次測量隊、中能登を行く(一)

— 加賀藩十村^{とむら} 真館四郎大夫「覚書」より —

河崎 倫代

はじめに

第四次測量隊の加賀藩測量の様子を記した地元史料としては、石川県立歴史博物館『新田家文書』の「為公儀測量御用天文方伊能勘解由殿海辺通巡行付応答之趣書上申帳」(以後、「新田書上帳」)と石川県立図書館『真館家文書』の「為測量御用伊能勘解由殿巡路取扱之趣書上申帳」(以後、「真館書上帳」)が知られる。前者は河北郡、後者は鹿島郡の十村(他藩の大庄屋にあたり、数十カ村を管理する)が加賀藩に提出した報告書の控えであり、石川県のほぼ中央部にあたる中能登地域での測量の様子が詳述されている。忠敬の肉声が聞こえてくるような臨場感あふれる場面や、測量方法・測量器具に関する記述もあり、加賀藩測量を知る貴重な史料である。筆者はこれまでに、この二点を「加賀藩十村役の報告書に見る伊能忠敬の領内測量」(『加能史料研究 第六号』一九九四年)と「密着リポート」伊能忠敬測量隊^① (『金沢学院大学附属高等学校紀要 第十四号』一九九七年)で紹介した。

その後、石川県立図書館『田中文庫』に「為測量御用天文方高橋作左衛門殿弟子伊能勘解由殿浦方御巡行二付前後諸事覚書」(以後、「真館覚書」)があることを確認した。これは、実際に測量に随行した鹿島郡十村真館四郎大夫の手代(十村に仕えて種々の雑務にあたった)の覚書であり、これを基に「真館書上帳」が作成された。第四高等学校の数学教授だった田中鉄吉(一八六一〜一九四五)が写したもの

で、若干の誤写・誤読があるかもしれない。原本はおそらく『真館家文書』の中にあつたと思われるが、今は所在不明となっていて、比較考証はできなかった。

加賀藩は現在の石川・富山両県を領地としていたが、本稿では石川県域のみを扱う。石川県では現在でも、北部を「能登」、南部を「加賀」と呼んでいる。近世にはさらに、能登の北部を「奥郡」(珠洲郡・鳳至郡)、南部を「口郡」(羽咋郡・鹿島郡)としていた。「真館書上帳」は口郡の報告書であり、現在のところ、奥郡での測量隊の様子を記した史料は発見されていない。

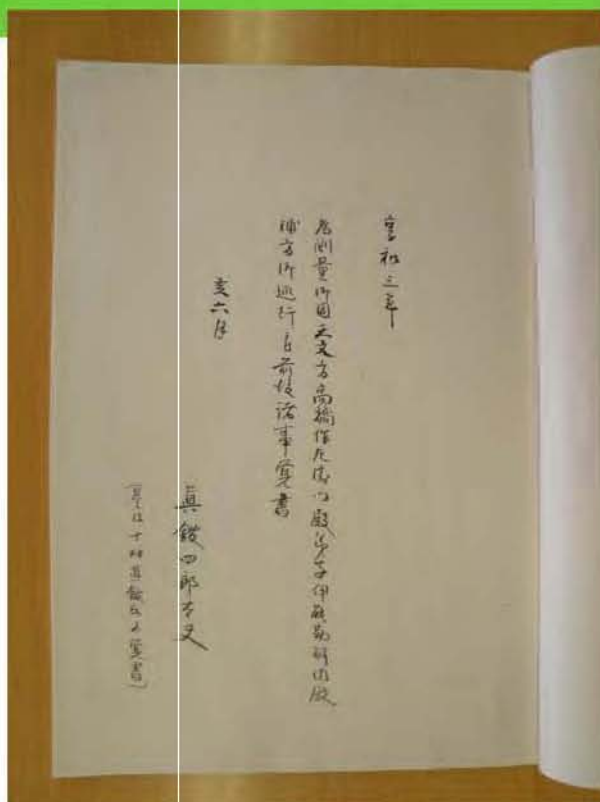
享和三(一八〇三)年二月に幕府から領内測量の予告を受けた加賀藩では、情報を収集し、測量隊への対応を決定して、領内へ通達した。その概要は、「郡境・村境には杭を打たせない」、「忠敬は百姓身分だから重き扱いには及ばない」、「隠密がましいので、村高・家数などは答えない」というものだった。実際、測量隊の対応には藩士・十村クラスは出さず、十村の手代と村役人があつた。

今回、田中文庫「真館覚書」を本誌で紹介するにあたって、次の四回の連載を予定している。初出史料ではあるが、「真館書上帳」の底本である以上、前掲二誌の報告ときわめて類似した部分が多くなることをお断りしておきたい。

- 第一回 河北郡高松村から羽咋郡今浜村まで(本隊)
- 第二回 今浜村から鳳至郡黒島村まで(平山郡蔵隊)
- 第三回 今浜村から鳳至郡乙力崎村まで(伊能忠敬隊)
- 第四回 鳳至郡甲村から鹿島郡大野木村まで(本隊)

一、田中文庫「真館覚書」解説文

— 河北郡高松村から羽咋郡今浜村まで —



田中文庫「真館覚書」(石川県立図書館)(表紙)

享和三年
為測量御用天文方高橋作左衛門殿弟子伊能勘解由殿
浦方御巡行二付前後諸事覚書

亥六月

真館四郎太夫

(是は十村真館氏の覚書)

一、御巡行筋御普請橋及大破候分、前方御普請願置候分、御郡所よ

り御作事之再往被仰遣候図にて、修復方御入用銀御書記、右銀高之通太夫為致出来候様、六月廿八日の御紙面を以て、駅々十村中に被仰渡、其段村々え申渡候事

一、六月廿七日夜大雨洪水にて、御通行筋武部村しきの橋、久乃木村石塚橋、町屋村領落合橋、皆々流落申二付、御巡行指支候間、早速御普請被仰付候様御達遣候処、御取扱の様子も替り候哉、右落申橋々之儀、如何様にも取計、廻道にても通行相済候様可仕、御普請□御聞届難被成旨、七月二日金沢表にて手代藤吉へ被仰出候。

但、此儀、右之通御断御遣候得共、急に御通行之程も難計旨、加州方主付十村中より申来候二付、如何様にも取計急々懸候様、村々江七月朔日二申渡置候

一、勘解由殿七月朔日宮腰御泊り所より、二日四ツ時頃金沢江御越、則、宿尾張町住吉屋太兵衛方

一、三日朝金沢御出立、宮腰江御帰測量被致、同日粟崎泊り

一、四日粟崎出立、荒屋昼にて、高松え昼九ツ時着之由、依之河北郡主付十村中より飛脚書状を以て、明日御泊り昼之儀御尋被成度候間、御役人之内御一人、早速御越被成候様、被仰渡候段申来り候、尤、主付手代次郎助・次助兩人遣置候得共、右紙面相分り不申二付、若村役人の事にも可有之哉と、今浜村肝煎文右衛門指遣候得共、主付手代共にて相弁、文右衛門儀罷帰候

一、四日勘解由殿等高松村止宿二付、西人手代共、宿主嶋屋市郎右衛門を以、能州郡方才許之者手代に御座候、御用儀御座候ハ、被仰下候様為申達候所、是え御通り候様にとの事二付、次の間迄同公仕候所、勘ヶ由殿より被申談候者、先達御触の通、能州筋今浜辺にて致手分、一手は内筋七尾江罷出、東海二添相廻り、一手は

西海に添相廻り候間、其図を以、泊・休所等不指支様有之度、段々被申聞候二付、同五日、外・内、泊・昼所圖置候趣申達候所、其通にて可然旨被申聞、内筋えは勘ヶ由殿上下五人、今浜村昼休、子浦村泊り、六日高島村昼休、二宮村泊り、七日所口町泊、外筋えは弟子平山郡蔵上下三人、今浜村昼、鹿浜村泊、六日柴垣村昼、大念寺新村泊の趣に相決し、内・外共先觸可指出旨、被申聞候二付、兩人手代共罷帰候

一、五日朝六ツ頃高松出立二付、主附手代藤吉・次郎助・和助・次助、并二道案内村役人二人同道、御郡境え罷出居申所、無程勘ヶ由殿等、長十間計の鉄くさりを為引被罷越候二付、手代共勘ヶ由殿え相向、是より能登国羽咋郡にて御座候段申達、道案内村役人も平伏仕居候所、夫え罷出候役人中は泊り所迄案内有之儀に候哉、直二案内有之村名等尋候品相分り不申候ては指支候段被申聞候二付、御用の品は私共え被仰聞候様仕度段、手代共より申達候所、浦伝家建相隔見へ不申村者、大抵家建之下と存候所にて、何村浦と申達候様有之度旨被申聞候二付、承知仕段相答候處、左候ハ、案内有之候様にと被申聞、右くさり、高松村領より中沼村領え被引通候二付、手代共より申達候は、郡村境等丁間打立之儀に御座候哉、若左様之儀に候得者、上役之面々より申渡之趣有之、手代共了簡二難及段申達候所、勘ヶ由殿被申聞候者、全国郡村境等しらべ申にても無之、今般日本絵図方二付、諸国測量候由被申聞、村々領境等尋も無之、加州筋被仕米候趣二御座候

一、米出村領にて、国山井子浦村海士崎、且又高島村五石ヶ峰・石動山被相尋、遠目鏡を以被見請候

一、今浜村領中にてくさり被引留、其場所に驗竹を被当置、夫より今浜村昼宿権左衛門前迄くさり被引候

一、昼休後、権右衛門前よりくさり被引懸候二付、手代共より勘ヶ由殿え申達候は、所口町迄道筋測量被成候哉、内筋の儀は御巡見而已と相心得罷在候段申候處、能州の儀者今浜辺にて二手に相成、一手は陸地より七尾え罷越候段、従公辺御觸有之承知の通にて致測量候義、指支不申旨被申聞、道筋曲々には磁石を立、方角被見請候休御座候

二、田中文庫「真館覚書」口語訳

※ 逐語訳では分かりにくい箇所は、意識を試みた。

() は筆者の補足である。

(表紙略)

一、測量隊の巡行筋にある御普請橋(郡經費で普請することが明記されている橋)のうち、今度の大雨で大破した橋と、前より普請を願ひ出していた橋の普請を、郡役所から藩の作事所へ再度願ひ出るつもりで、修覆に必要な入用銀の見積りを書き出し、その銀高の通りに堅牢に仕上げるようにと、六月二十八日の紙面をもって、(郡役所から) 駅々の十村たちに仰せ渡され、さらに村々へも申し渡した。

一、六月二十七日夜の大雨による洪水で、測量隊の通行筋にあたる武部村しぎの(鳴野)橋、久乃木村石塚橋、町屋村落合橋が流れ落ちた。測量隊の巡行に差し支えるので、早速、普請を仰せ付けられるよう御達を遣わしたところ、取り扱ひの様子が変わったのか、流れ落ちた橋々は如何ようにも取り計らい、廻り道で通行が済むようにして、新たな普請は御聞き届け成り難いという旨、七月二日、金沢表にて手代の藤吉に仰せ出された。

但し、この件は右の通りお断わりになったけれども、「(測量隊が) 急に通行したいという場合もあるかも知れず、予測しがたい」



現在の石塚川（中能登町久乃木地区）

と、加賀の方の担当十村から申し来ただったので、「如何ようにも取り計らい、急いで橋を懸けるように」と、七月一日、村々へ申し渡した。

一、勘解由殿（伊能忠敬の隠居名）は、七月一日、宮腰（金沢市）に宿泊し、二日四ツ時頃に金沢へお越しになった。宿所は尾張町住吉屋

太兵衛方である。

一、三日朝、金沢を出立され宮腰へお帰りになり、そこから測量を開始して、その日は栗崎村（金沢市）に宿泊された。

一、四日、栗崎村を出立し、荒屋村（内灘町）で昼食をとり、高松村（かほく市）へ昼九ツ時に到着の由。河北郡の担当十村から来た飛脚の書状には「明日の宿泊地と昼食地を尋ねたいので、村役人一人、すぐにお越いただきたいと仰せである」とあった。担当手代の次郎助と次助の二人を遣してはいたが、右の紙面の内容がよく分からず、もしかして村役人の事かもしれないと思い、今浜村（宝達志水町）の肝煎文右衛門を遣わしたが、担当の手代たちで間に合ったので、文右衛門は帰ってきた。

一、四日、勘解由殿たちは高松村に宿泊するので、二人の手代が伺い、宿主の嶋屋市郎右衛門から「能州（能登国）郡方才許の者の手代にございます。御用がありましたら仰せ下さい」と申し上げたところ、「こちらへお通りなさい」と言われ、次の間まで伺った。そこで勘解由殿より申されたことは、「先だつての御触の通り、能州筋の今浜村辺で手分けし、一手は内筋を七尾へ出て東海に添って廻り、もう一手は西海に添って廻るので、そのつもりで宿泊・休所など差し支えないようにしてほしいと申し聞かされたので、五日、外筋・内筋での宿泊地・昼所の予定を申し上げたところ、「その通りでよろしい」といわれ、内筋へは勘解由殿等五人、今浜村で昼休み、子浦村に宿泊、六日高島村で昼休み、二宮村に宿泊、七日所口町（七尾市）に宿泊。外筋へは弟子の平山郡蔵等三人、今浜村で昼食、塵浜村に宿泊、六日柴垣村で昼食、大念寺新村に宿泊と決まり、内筋・外筋とも先触れを差し出すように申し聞かされて、二人の手代は帰ってきた。

能登半島手分測量の起点今浜宿
(宝達志水町今浜地区)



測量隊が宿泊した高松宿
(かほく市高松地区)



一、五日朝、六ツ頃高松出立二付、担当の手代藤吉・次郎助・和助・次助、道案内の村役人二人が同道して郡境へ出ていたところ、程なく勘解由殿等が長さ十間ばかりの鉄くさを引かせてお越しになった。手代どもが勘解由殿へ向かつて、「これより能登国羽咋郡でございます」と申し上げ、道案内の村役人も平伏していると、「それへ罷り出た村役人たちは、宿所までずっと案内するのですか。案内する先々の村名等、こちらが尋ねることが答えられなくては差し支えが出ます」と申し聞かされたので、「御用の件は私どもへ仰せ付け下さいますように」と手代どもより申し上げたところ、「浦伝いに測量していて家建が見えない村は、家建の下あたりで、ここは何村の浦と申し出てほしい」と申し聞かされたので、「承知致しました」と答えたところ、「それならば案内するように」と申され、先ほどのくさを高松村領より中沼村領へ引き通されたので、手代どもより「郡や村境等の丁間（距離）を測量なさるのでしょいか。もしそうでしたら、上役の面々より申し渡すことがあり、私たち手代どもでは判断しかねます」と申し上げたところ、勘解由殿からは「国境や郡・村境等を調べるのではなく、今回は日本絵図を作成するために諸国を測量しています」と仰せられ、村々の領境などのお尋ねもなく、加賀の浦筋でなさったとおりのようであった。

一、米出村領では、国山、子浦村（海士崎のある千浦村か）の海士崎、高畠村五石ヶ峰・石動山を尋ねられ、遠目鏡で見ていた。

一、今浜村領でくさを引くの留めて、その場所に験竹を立て置かれ、それより今浜村の昼宿である権左衛門（権右衛門か）前までくさを引かせた。

一、昼休み後、権右衛門前からくさを引かせ始めたので、手代どもより勘解由殿へ「所口町（七尾市）までの道筋も測量なさるので

しようか。内筋の方は巡見だけと心得ておりましたが」と申し上げると、「能州では今浜辺で二手に分かれ、一手は陸路を七尾へ罷り越すと、幕府よりお触れがあり、ご承知の通りです。測量するのに差し支えないはずですよ」と申し聞かされ、道筋の曲り角には磁石を立てて方角を見ている様子だった。

三、中能登の「今」を行く

伊能忠敬測量隊の詳細な報告書、「真館書上帳」や「真館覚書」を今に残してくれた加賀藩十村真館家は、現在どうなっているのだろうか。三月六日（日）、新会員の相良君・江波君と三人で武部村を訪ねてみた。いわゆる平成の大合併で誕生した鹿島郡中能登町武部地区の通称七尾街道（県道二四四号線）武部会館バス停から少し入ると、立派な庭園を持つ旧家があった。しかしそこは十村真館家の分家だった。本家は隣接地にあったが、今は所有者も変わり、草地となっている。白壁の土蔵だけが取り残されたように建っていた。この中に「真館書上帳」や「真館覚書」が保管されていたのだろうか。高校時代に暗唱した『方丈記』の冒頭部分が思い出された。

たましきの都のうちに、棟を並べ甍を争へる、高き卑しき人のすまひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるは去年焼けて今年作れり。あるは大家減びて小家となる。

（かわさき みちよ）



加賀藩十村真館家跡地と白壁の土蔵

唐津、伊万里辺の忠敬の先触れと村方記録

渡辺 一郎

はじめに

九州の井上会員から、筑紫史談拾七号（大正七年六月二十五日発行）の写をいただいたところ、そのなかに伊能忠敬が第八次測量で唐津から伊万里を測量する際に出した先触れを含む一件資料が掲載されていた。行列の次第など、他の地域の資料には見当たらない記述があるので報告する。



『筑紫史談』17号表紙

まず、忠敬先触れの本文があつて、測量経路の概略を示して、御証文の人馬の提供を求め、宿舎と夜分の天測場の用意を依頼し、休泊代はお定め賃金を払う。一汁一菜之他は無用として、御証文写、書き上げ案文がしめされている。

御証文写の内容は形どおり控えられている。測器運搬には人足七人馬一匹、長持ち二棹の持ち人足。一行の旅行用には人足一人、馬六匹で、忠敬が人足一人馬二匹、天文方の坂部、永井、今泉、門谷には各馬一匹が与えられている。そして、そのあと測量に差し支えないよう手配せよ、船が必要なら船を用意せよという次の文面が続く。

伊能勘解由儀為測量御用東海道藤澤大山通り富士街道早洲廻り遠州秋葉三洲鳳樂寺濃洲明知廻り尾張名護屋より美濃路中山道筋山城筋山城淀より山陽道赤間關夫より九州壹岐對馬五嶋其外嶋々廻浦歸山陰道丹波より京都廻り中山道大田より郡上通り飛騨信濃上野武蔵秩父街道往返共於途中茂測量可致間其先々に而差支無之様致し尤地方通行難成所は其所より船を出し案内致無差誤様可致者也

備前印

文化八末十二月

宿々
村々 年寄中

これは老中・牧野備前守（長岡藩主）の印が押され、忠敬が持つて歩いた御証文三通のなかの一通の写である。これによって沿道から無料で旅行用人馬の提供や船用意などの便宜を受ける権利が発生する。老中の他に勘定奉行、京都所司代、大阪城代など幕府要職にのみ発行権があつた。宛先は遙か左下の年寄中（年寄一同）である。

次の文を読むと、文化九年八月二十四日酉の下刻というから大体午後七時頃、唐津継所についたことが分かる。刻付けの至急報だからすぐ写しを取って、戌の上刻というから、八時台には左のような送り状を付けて徳末継所に送ったという。

継所の制度はよくわからない。御承知の方がおられたら教示をお願いしたい。

右御先觸書御證文寫御案紙八月二十四日酉下刻三奈木より参る 寫
取左之状送り状共同夕戌上刻久喜宮へ直に為持遣す

覚

一、御證文寫 但壹からげ

三 通

一、書上帳

壹 冊

一、御先觸

壹 通

×箱に入

右之通り繼送り候間御改御受取被成即刻御順達可被成候以上

申 八月十九日

唐 津 繼 所

徳 末 繼 所

徳末 伊萬里 本部 小田 牛津 嘉瀬 佐賀 境原 神崎 中原

森木 田代 原田 二日市 宰府 甘木 三奈木 比良松 久喜宮

江送り

右御觸状文化九年申八月廿八日巳ノ刻比良松於大庄屋元寫之者也

この文書は八月廿四日に三奈木から繼ぎ送ってきた文書を、比良松の大庄屋が八月廿八巳の刻というから昼前の十時ころ写しとつたものという。月日が一致しないから、繼ぎ送りの現場ではなく、後日記録のために写したもののだろう。

村役人出方役割

測量当日の役割表である。

一、大御先拂

長淵村組頭

傳 次

箒持夫貳人

同村より出す

隊列の遙か前方を進み、どいたどいたと野次馬を払い除ける仕事で郡方や浦方の同心が務めることが多かったが、村役人が務めることもあった。そのときは村役人は脇差を帯び、羽織、股引支度が普通だった。箒持ちは清掃人足。馬糞、牛糞が多かったのだろう。先払いを大先払い、先払いと二段重ねるのは珍しい。

一、梵 天 持 才判 入地組頭

次左衛門

持夫拾五人 同村より出す

同拾五人 宮野村より出す

梵天持ち夫はこんなものだろう。才判は指揮者。裁判の語源という。

一、御先拂

上寺村組頭 良左衛門

箒持夫貳人

同村より出す

二段目の先払い、こちらは多分数十間先だろう。

一、伊・能・勘・解・由・様 (御案内)

下大庭村庄屋 彌右衛門 志波村庄屋 才八

忠敬には案内人が二人ついた。

一、道中記方

入地村庄屋 十平 鼓村庄屋 勝助

書上げ担当かと思つたが、途中経過の記録係だった。珍しい。

一、繪圖面方 中村庄屋 平右衛門 黒川村庄屋 藤右衛門

測量隊に提出する村絵図の担当だろう。

一、數取庄屋 菱野村庄屋 四郎吉 宮野村庄屋 喜右衛門

大山村庄屋 文右衛門 穂坂村庄屋 良右衛門

測量中、読み上げられるデータを梵天持ちが持つっている帳票または自分が持つっている帳面に書き込んでゆく役。

一、磁石臺持裁判

大庭村組頭 久 七

方位盤、半円方位盤などの台を持ち運ぶ人足の指揮者。

一、御繪圖持裁判

上寺村組頭 榮 助

現場に、提出した村絵図、測量下図、参考絵図などを持ち運んだ人足の指揮者と思われる。人足数人がかりで運ぶほど資料を現場に持ちだしたことをうかがわせる記述である。

一、杭掛屋持裁判

宮野村 久 助

測量杭と杭を打つ掛矢を持ち運び、杭打ち作業する人足の指揮者も用意された。

一、毛氈野風呂番戸類裁判

石成村組頭 彌四郎

小憩するとき、腰かけに敷く毛氈、お茶を沸かす小さなお風呂の形をした湯沸かし、ばんこ（他でも出てくるが意味を失念。縁台かな。乞う御教示）など持ち運び人足の指揮者。

一、御朱印御長持裁判

多々連村組頭 卯三郎

ここでは長持ちは二棹携帯していた。定数は一棹四人なので、計八人、肩代わりを付けると一六人になる。資料が増えて重かった（規定では廿貫）ろう。増人足だったのでは。これは大仕事。

一、御竹輿傘裁判

下大庭村組頭 傳 吉

竹の簡単な駕籠（青駄）のことか。測量現場で少し離れた移動に

使われたらしい。傘は日傘、雨がさ。いずれも忠敬の身辺サービス要員である。

一、御用持裁判

入地村組頭 伊 助

役割不明。いまさら御用旗でもない隊列である。早朝夜明け前出発となるので、高張り提灯、手提灯が必要だった。あるいは御朱印箱など忠敬私物運搬か。

一、福岡御役人方御聞次

田中村 登 平

随従する福岡藩士の指示を村方に取り次ぐ役か。

比良松御晝所

昼食を取った比良松での世話係り

一、勘解由様

宿亭主 大庄屋代勤 登久右衛門

一、同所詰方

長淵村庄屋 亦三郎

一、御下役

宿亭主 上寺村庄屋 常次郎

一、町内御宿々

比良松村庄屋 藤 作

一、下町御宿々

諸裁判 須川村庄屋 恒右衛門

諸裁判 大庭村庄屋 卯 七

付廻り役人以下は分散らしい。

織面田御小休所

一、勘解由様

宿亭主 古毛村 清 三

一、同所詰方

古毛村庄屋 小 平

一、立下宿見ケメ

長淵村庄屋 亦三郎

全 忠 平

立下宿見ヶへは分らないが、休所に派遣されていて、出立すると、いま出ましたと通報する係りではないか。お立ち見立てといわれている。途中の経過地に人足を配置して通報させたところもある。

山田村御泊所

一、勘解由様 宿亭主 清 蔵

一、同所詰方 鳥集院村庄屋 嘉 平 次

一、永井甚左衛門様 宿亭主 武 作

一、同所詰方 石成村庄屋 亦 七

一、原左太夫様 宿亭主 吉郎右衛門

一、同所詰方 上寺村庄屋 常 次 郎

一、上野小八様 宿亭主 宿詰兼ル 新 四 郎

一、山本源助様 宿亭主 □ 軒

一、同所詰方 多々連村 清右衛門

一、町内御宿々 諸裁判 大庭村庄屋 卯七 石成村庄屋代勤 次 八

大庭村代勤 茂三郎 多々連村 組頭中

一、火 番 菱野村組頭 久助 古毛村組頭 善次

原、上野、山本、は付廻りの藩士らしい。その他の関係者は町内に分宿。火番は夜廻りで、人足を連れて終夜警戒にあたった。

一、假御郡屋詰方 比良松村庄屋 藤作 長瀬村庄屋 又三郎

全村 惣太郎

役割不明。

一、人馬裁判 須川村庄屋 恒右衛門 古毛村庄屋 小平

須川村組頭中 下大庭村組頭 宅 平

入地村番頭 兵八

人足、荷馬の手配。これは大変な役。

一、諸品請拂請持

上寺村 興右衛門 大庭村組頭 卯 平

古毛村組頭 茂 吉 田中村組頭 恵 助

入地村組頭 勘右衛門 長瀬村組頭 卯 平

比良松組組頭 吉郎右衛門 宮野村組頭 喜 次

宿泊、食事に必要な器具を、損料を払って借り集め、食事の材料を購入するなど経理、資材部門の責任者たち

一、其村切案内庄屋名代付

山田村 利三郎 菱野村 久 助

古毛村 善 次 須川村 藤 市

比良松村 吉右衛門 宮野村 善 吉

下大庭村 宅 平 入地村 兵 八

石成村 儀 助

各村毎に忠敬に挨拶して、近くに位置し質疑に応じ案内する庄屋名。地理的なことは聞かれても分からないので、地理巧者の名代を連れて出た。名代付はそんな意味だろう。

一、久保鳥川越 裁判 下大庭村 組 頭

一、中町川越 裁判 入地村組頭

一、比良松川越 裁判 宮野村組頭

一、牟田川越 裁判 古毛村組頭

川越には、踏み板、船渡し、仮橋、船橋など色々あった。川ごと

に人足と責任者が決められた。

御役人様方御着迄受持裁判

付廻りの宿の担当者

一、左太夫様御下宿三人内一人夫	大庭茂三郎
一、小八様御下宿御一人	石成次八
一、源助様御下宿御一人	嘉平
一、篠田正貞様御三人	千作
一、藤本圭次様御二人	宇吉
	清次

以上が付廻り藩士で供をつれている者は人数が増える。三人なら供が二人である。一人の者は供なし。夫は人足。

一、賭方上下貳人内夫一人見ケメ	源次
一、賭方五人	千代吉

料理人は助手を連れた板前を他から頼んだらしい。賭方はその作業員ではないか。

一、綱引五人 御三人	又吉
------------	----

よく分からないが、鉄鎖、間縄を引く人足は馴れないと仕事が進まないで、郡中を通し人足にした例がある。綱引五人はそうも考えられるが、御三人は分からない。全員三人で綱引五人では意味不明。逆なら話はわかるが。

一、青柳勝次様上下貳人内夫貳人	清太郎
-----------------	-----

青柳は、福岡の国学者青柳種信のことである。文化九年七月の測量の際に浦方の下役として伊能測量に付廻り、その学識に崇敬は深く感銘し、二度目の担当外の測量にも呼び出して随従をもとめた。青柳は、藩命を受けて付廻った。常に忠敬の周辺に従ったと思われる。上下貳人内夫貳人は納得できない。

一、御乗物	裁判	菱野村組頭	只七
一、御長持	裁判	大庭村代勤	茂三郎
一、馬裁判		下大庭村組頭	藤五郎
右は山田村より久喜宮村御泊り所迄		多々連村組頭	貞八
十月二日			

同じような役割が出てくるが、どう役割が違うか定かでない。

測量方山田御泊りに付宿々献立	文化九年申十月二日
献立	平
飯	鶏、大根、牛蒡、青み
汁	豆腐、竹把
御酒	吸物
引物	松茸、竹巴
鉢	ひたし
押	鶏いり付、芋色々
翌朝献立	平
飯	ねり葛、鯖一切
汁	くずし豆腐

献立はこれまで筆者が見たなかでは質素である。御酒は肴の意味だと思うが、原則禁酒なので、正式にお酒をつけるのは打ち上げ会くらいだった。

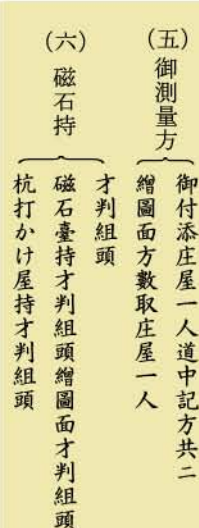
行列次第



隊列に先頭は先払い、続いて 梵天持ち十五・六人、綱引き五・六人、そして数取り庄屋が着く。そして全体を勘解由(忠敬)の家来が指図する。家来は従者のことだが、ここでは棹取り中間を指すと思われる。そのあとに組頭に指揮された、杭、掛矢持ちが続く。



梵天部隊が出たあと、もういちど掃除が入って忠敬一行の出番とは驚いた。その村の案内庄屋が地理に詳しい者を連れていた。青柳はこのグループだったと思われる。



忠敬の後に測量方が続くことになっているが、メンバーは下役四人と内弟子四人である。付き添い庄屋、道中記方、絵図面方、数取

り庄屋がつく。道中記方は書き上げ担当かと思ったが、経過の記録係りのようだ。

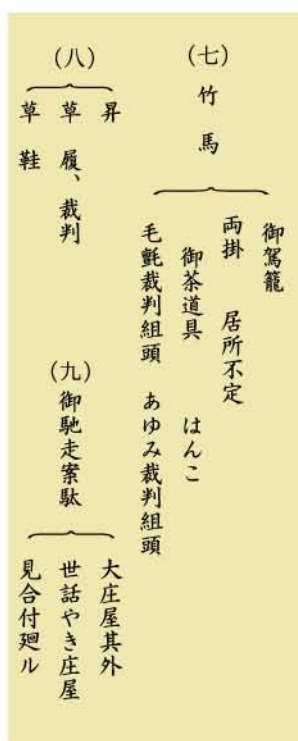
この隊員の役割は、本(正) 羅針、添え(副) 羅針と、現場の作業指揮だから、ここにまとまって歩くばかりということとは考えられない。

梵天の位置決め、梵天、杭の近くで、正視、逆視で方位を測る、交合法目標を測る、間縄引き作業の指導など、間縄作業班と入り混じって仕事が行われた筈である。

しかも、原則として先手、後手の二手分けがおこなわれたから、全隊員は二組に分かれ、別手は坂部が忠敬に代わって全体指揮をとった。

次項の磁石持ちグループは測量現場作業の道具運搬係りだ。

これらで見ると大体の並び順を示したもので、このとおり歩いたということではないと思われる。



このグループは完全なサービス部隊で、実務部隊の跡をついて歩き、用務を命じられたとき、前に進んで用を足した。

駕籠は乗用の駕籠で測量区間の作業が終わって、宿舎に直行する際に忠敬の乗用に用いられた。作業中利用する竹輿とは別なもの。両掛は忠敬の身分を示す道具だから、本人の近くにいないとならない場

合もあつたろう。毛氈、お茶道具などは小憩用品、あゆみは踏み板か？
ばんこは縁台だったように思うが？

昇り、草履、草鞋は人数が多いから補給係りは大仕事だ。そして支援隊本部の大庄屋グループが続く。駕籠は下役の分も提供された場合がある。また、予備駕籠は何処でも用意され、急病などあったとき次の宿舎に送り届けられた。

○毎夜星測も節撰夫六七人留見ケメ等に庄屋壹兩人立廻り
但御著後晝之内星測臺に取立に相成候事

天測場には六・七人人足を出し、庄屋も見廻った。象限儀は到着後、昼から組み立てがおこなわれた。

○曲り目又は岩鼻に磁石居り方角見積り又遠山調子一切
曲がり角や岩鼻には方位盤を据えて方角を測り、遠山も測った。

○右御一鼻之人数貞兵衛御測量之節右之通惣人数罷出る 但海岸船も寄かたき場所にて候へば勿論煩雜にて出方の者格別指働不申而は不都合に有之候事

手分け隊にも同じような人数がでること。船が岸に寄せにくい場所もあるので、手伝いのものは特別に働くようにしなければならない。

○此札綱引裁判か数取庄屋か書認、梵天竹に持添させ置先に行く
この札を綱引裁判か数取庄屋か書いて梵天持ちに持たせて先に行く。数字は棹取りが読み上げる。

○数取庄屋跡よりはしり付右梵天に持添之札を取道中記方之前に而間数等札表一切よみ上る

数取庄屋は後から走り寄って、梵天持ちが持っている札をとり、道中記方の前で間数などを読み上げ記録させる。

○札は不残札繁に指置候分を御側量相済之上御指圖を請相納る
札は残らず札繁に指しておき、測量後、指図を受けて納める。こ

正正元か何百間
村境
百五拾間



藩廳よりの觸状

では札へのデータ記入と札データの収集を村役人にやらせたようである。忠敬自ら方位を測り、札を受け取って記帳した、という記録もある。
札繁は図のような器具だろうか。

測量方八込前為下調子明廿九日上野小八山本源助左之通罷越候に付大庄屋付添村々庄屋案内いたし候様申出に相成候其心得各方并付添之庄屋一同罷出御手當向致承知候様可被取計候且又此間も達書を

以一統觸置候通案内庄屋之外にも数取庄屋等其外測量先就御用罷出候庄屋共は村高尋之節相答候村高をも此節致承知居候様有之度候條右類に掛候村役人等役割相極め夫々手都合可有之候以上

藩庁から下準備のため役人が向かうとの通達である。石高について聞かれた場合、決まっている通り答えるよう注意喚起している。

(わたなべ いちろう)



忠敬と大雄山最乗寺・道了講 私見

大 沼 晃

平成二十三年一月十日（成人の日）快晴、風やや強し。古希を過ぎた身に堪える早朝、わが住まいであるマンション最上階から西方を眺望すると、真白く輝く富士山や大山を見渡すことが出来た。昨晩は箱根の山に雪が降ったとかで、ラジオは箱根路のいたる所で交通止めになつていと報じていた。標高一二〇〇mほどの大山にも雪が降つたようで、山肌はうっすらと白くなつていた。（下写真参照）この時期の大山登山は、冬用の完全装備で出かけないと、山頂は積雪や凍結でとても滑りやすく遭難の恐れがあると聞いている。

第八次測量日記によると伊能忠敬は、文化八年（一八一）旧暦の十一月二十九日大山に登つたことが分かる。新暦で言うと一月上旬ごろで、厳寒のこの季節に相当するのではなからうか。なぜ、気象条件の悪いこの時期を選んで登頂したのか、その訳を筆者なりの推論を前号に記述（見晴らしのいい山頂から各方面の目標物を観測し、地図の精度を上げる云々）したが、鈴木事務局長よりご指摘があり、忠敬は当時一般的に使われていた「遠山仮目的（えんざんかりめあて）」を多用していたので山頂から観測するという推論に間違いがあることに気付かされた。【詳しくは、会報第九号 伊能忠敬の測量法を参照のこと】

方位線の入った地図は伊能図の特色であり、大山の頂に向けて十数本の赤い線が放射状に引かれており、当時は江戸市中に限らず関東周辺からでもよく見ることが出来たようだ。

今回は、前号に引き続き測量日記に基づき大山・南足柄・大雄山最乗



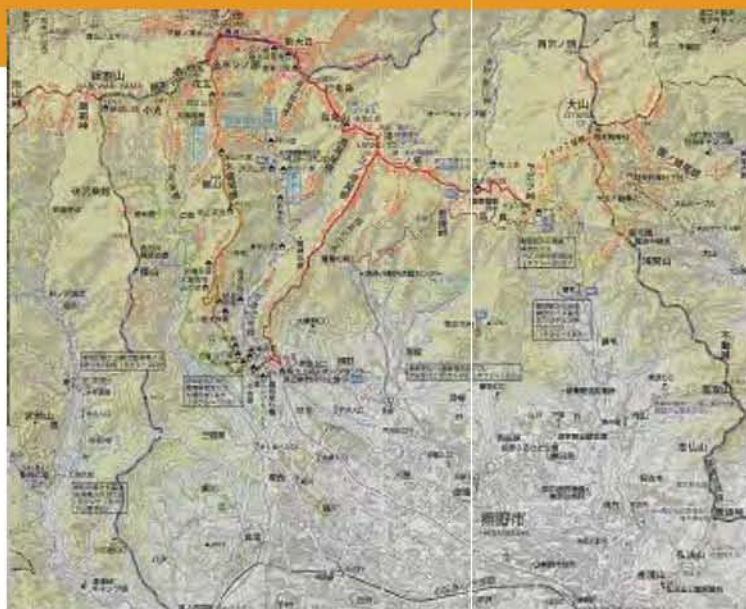
述していないので、筆者なりの解釈をご披露したい。【注・筆者注 釈挿入文】

さて、忠敬一行は大山山頂から四方を遠望する目的を遂げ、蓑毛道を秦野（はだの）盆地へ下り、田原村（現・神奈川県秦野市葛葉川の北岸あたり）の家主・儀衛門と百姓治郎左衛門宅に止宿。

翌十二月一日 曾屋村↓水無川渡河↓平沢村↓堀川村↓渋沢村↓千村↓菖蒲村（ここまで現在の秦野市。町村合併後も地名として現存）↓丹沢山塊から流れ下る四十八瀬川沿いに松田村（現・神奈川

寺までの道を辿りながら、忠敬の隠された意図を解明したい。その理由の一つに矢倉沢道を足柄峠に向けて直進せず、関本村の最乗寺道追分から道をそれて、最乗寺まで丹念に測量し絵図に残していること。次に、先手組を足柄上郡和田河原村追分から東海道の小田原宿まで出向かせ、わざわざ測量をさせていること。その理由を忠敬は日記に記

作が主であったようだ。その中でも煙草栽培（明治時代に特産品として隆盛を極める）が盛んであった。丹沢から流れる水や伏流水の恵み



県足柄上郡）に出る。
（上地図参照）

【秦野は、神奈川県中央部の西側に位置し、北は丹沢山塊、南は渋沢丘陵に挟まれている盆地。秦野市史によると家康江戸入府時代と相模国は、西部の小田原藩を除きほとんどが天領（直轄地）で、時代の変遷と共に旗本知行地として細分化されていったとのこと。測量日記にも何村は何某の知行地と裏付けられるような記述が見える。盆地であるが故に畑



があり、良質の水には困らなかったようだ。

村々を結ぶ道は、蓑毛道・富士道と称され、大山講や富士講・道了講の人たちが利用していた。伊豆国や三河国から小田原宿を経て、矢倉沢道↓蓑毛道を利用し大山詣をする人たちが賑わった。

秦野盆地の農民たちは、この道を利用し小田原方面へ農作物を運んでいたのではないだろうか。また、最大消費地である江戸に向けて物資を馬の背に乗せて、伊勢原から大山道・田村道に入り、田村の渡しまで運び相模川を荷船で河口まで下り、浦賀湊↓神奈川湊↓品川湊へのルートもあったのではないだろうか。単に呼称される信仰の道ではなく、当時は人・物・カネ・情報が頻繁に行き交う地域にとって重要な道であったような気がする。」

川音川渡河、足柄上郡に入る。松田村以降は小田原領↓神山（こやま）↓松田惣領↓吉田島村↓牛島村↓宮ノ台村↓竹松村↓和田河原村↓弘西寺村↓関本村間まで測る。止宿加藤滝右衛門、一同一宿。

【現在の松田町は、足柄地域にある中心的な町で、酒匂川、川音川、中津川とそれらの支流河川地域が町を形度っている。土地は、南傾斜地で水はけが良く温暖。茶やみかんが特産。松田惣領、松田庶子、神山、寄（やどりき）の四地域が明治二十二年合併し松田町になった。

松田惣領の「惣領」は「総領」と同意語であり、何故に地名の下に付いているのか不審に思い、松田町史を調べてみると意外な由来があった。古文書に『松田有常松田郷に住みて領主なり。有常二子あり、太郎某は弟なれ共妻の出なるにより太郎として本家を継がせた。次郎某は妾腹なる故に兄なれ共庶子として分家する。是惣領庶子に村の名の由りて起こる所以なり。是以前は一邑にして松田と称えしこと論なし』とある。一時、惣領地区を上松田、庶子地区を下松田と呼んだこともあったが、元の惣領と庶子に戻っている。これを読み、地名の由

来が明確になり納得できた。

その次に、松田有常とはいかなる人物なのか調べを進めると、意外や以外、藤原鎌足を遠祖とする藤原秀郷（通称・俵藤太、藤原北家・房前から五代目の人）の流れを汲む後裔（関東一円に一族が散らばる）相模国波多野氏（秦野氏）の氏族で、鎌倉期に残存した波多野氏一族をたばねる惣領家で、松田氏の始祖となった人であることがわかった。

松田氏は、小田原後北条氏（小田原役の折、家老職）に第一の家来として仕え、主家滅亡後、加賀前田家に四千石で召抱えられた。その分家には、徳川家の旗本になった家系もあるそうだ。小生の推測ではあるが、松田家は歴史の有る名門の出であるので、取り潰しにあわず本領安堵されたのではないだろうか。知識人である忠敬のことであるから、一連のことは知っていたような気がする。知らぬは意外と歴史教育の害に犯され、情報過多の現在人だけかもしれない。】

二日 晴天。先手（坂部一行）は、和田河原村追分より小田原に向けて測量。駒形新宿↓塚原村↓沼田村↓足柄下郡北ノ久保村↓府川村↓穴部村↓多古村↓井細田村↓池上村↓荻窪村↓小田原市中（広小路、須藤町、大工町、台宿、一町町田、青物町、高梨町）↓東海道まで測る。止宿本陣清水彦十郎。

【筆者は昨年の秋、神奈川県立歴史博物館の常設展示「近世」コーナーへ出向き、江戸時代の宿場と関所および旅道具類の展示を見学した。展示物の説明パネルを読み進んで行くと「矢倉澤道見取繪図」という文字が目飛び込んできた。一瞬ひらめいたので芸芸員を呼んで尋ねたところ、やはり「五街道分間延絵図」（寛政年間道中奉行から命じられ、文化三年に幕府に献上されたもの）の一環で作成された脇街道の絵図のひとつであることが分かった。県歴博にはなく県立美

術館にあるとのことで出向き閲覧すると、何と絵図の出発地点は小田原からで、御殿場に至るまでの見取絵図あった。絵図を見るまでは矢倉沢往還Ⅱ江戸から矢倉沢関所までという既成概念を持っていたので、何故なんだという驚きを禁じ得なかった。（上図参照）

絵図の中の解説書「矢倉沢道の歴史の跡」児玉幸多氏の記述の中に『（前略）矢倉沢道は、駿河と甲斐や相模西部を結ぶ物資の輸送路として、また富士道



者の通路として、或いは甲州方面から東海道の三島や沼津、または箱根に赴く人たちの重要な交通路になっていたのである。

（後略）

そのような背景もあり、忠敬は幕府の意向を強く受け、小田原―関本↓御殿場間の詳細

な測量に着手したような気がする。そのようなことで一つ目の疑問点が解消できたのである。】

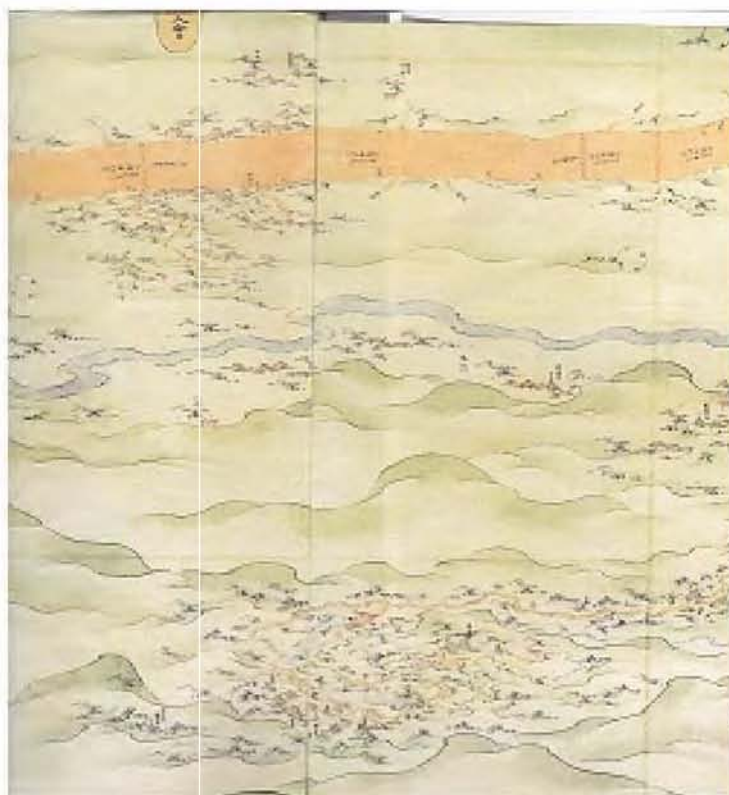
一方後手（忠敬一行）は、関本村最乗寺追分碑より飯沢村を経て最乗寺まで測る。その後、関本村まで引き返し止宿前より測量開始。福泉村↓雨坪村↓弘西寺村↓刈野岩村↓刈野一色村↓矢倉沢村まで測る。矢倉沢関所役人の柴山軍兵衛、安藤儀右衛門の出迎えを受ける。止宿

藤屋清藏。

【忠敬が矢倉沢道をそれて測量をした最乗寺の概要は、箱根外輪山の明神ヶ岳（一一六九m）の北東側山麓に位置し、正式名称は大雄山最乗寺。応永元年（一三九四年）に了庵慧明が開山。永平寺（福井県）や総持寺（横浜市）が大本山で、それらに次ぐ格式のある曹洞宗のお寺。門葉あわせて四千余の末寺をもつ大寺。ご本尊は釈迦牟尼仏。日夜鎮護国家を祈り、真人育成の道場として精進を続けている六〇〇来の巨刹。二十七万平方メートルにもおよぶ広大な寺域には樹齢五〇〇年以上の老大杉（県天然記念物）が茂っており、山々に霊気が満ち溢れる霊場で堂塔は三〇余棟に及ぶ。地域の人々には、別な呼び名として「道了さんまたは道了尊」と親しみを込めて呼んでいる。忠敬の中図にも「最乗寺・道了権現」と併記されている。

『新相模国風土記稿』には、『道了は旧了庵の徒弟たり、寺伝に拠に無双の大力にして、当山を開く時、師に力を合わせ、一人にて大木大石を除き、其功少からず、又師の為に、当山守護の請願を八発起し、応永十八年、遂に天狗になりて、山中に往せり、（略）』と書かれている。（右下絵図は矢倉沢道見取絵図の最乗寺部分）

また、最乗寺の案内のしおりには、『（前略）応永十八年三月二七日御歳七五歳で遷化。その時のお姿が威烈、厳かとして火焰を背負い右手に利剣を、左手に綱をにぎり、しかも白狐の背におたちになったもので衆人悉く恐懼合掌するうちに天地鳴動してかきけす如く全身をかくされた』とある。多分当時の人々は、妙覚道了を茶毘に付し昇天して行く様を「火焰を背負い・・・天地鳴動云々」と表現し、また、超人的な働きを畏怖して「天狗」の姿に昇華させ、道了尊とあがめたのではないだろうか。そのいわれが江戸のいなせな男（火消し、大工・鳶職人、鍛冶職人など）たちの道了尊信仰の淵源になったような気が



する。

好奇心旺盛で名所などにこまめに立ち寄っている忠敬は、このような霊地をぜひ訪れたいみたいという気持を持っており、また、ひよつとしたら「矢倉沢道見取絵図」を閲覧して、自分の絵図にも残したいという考えがあったのではないか。このような観点から二番目の疑問も何となく解消できた次第である。】

（おおぬま あきら）

研究レポート『伊能忠敬』（十二） 忠敬の見た風景（その六）

石谷 春香

六日目 八月十日 晴れ

最後の日です。

今日は家まで帰ります。

朝食はバイキングです。けっこうすごいところです。

早く行ったので窓ぎわの席が取れました。

ながめもとてもいいです。

ゆっくりしていたのですが食べたら出発です。

出口のところで自転車を出してもらいました。

スタートです。

ランドマークにお別れです。

22 横浜市西区

みなとみらいに行きます

マルイとそごうの場所を通っていきます。

みなとみらい大橋を渡ります。

23 横浜市神奈川区

進みます。

24 横浜市鶴見区

キリン横浜ビアレッジでちょっと休けいです。

生麦事件の碑があります。

一八六二年（文久二年）薩摩藩の大名行列を横切ろうとした英国

人が殺傷された事件です。

「かながわの古道五〇選」に
選ばれています。

進みます。

高速道路の下のさみしいところ

を通ります。

鶴見川にかかる鶴見大橋を渡

ります。

また橋を渡ります。JR 鶴見線

があります。

倉庫が結構あります。

さみしい公園の横をとおりま

す。

トラックがじゃまで行けない！

なにもないところです。

倉庫です。

25 川崎市川崎区

トラックとかが多く走っています。

なんだかきたないところです。

だれもないところを歩きます。

JR 南武線浜川崎駅があります。

公園みたいなところの横を走って行きます。

ホームレスがいっぱい住んでいるところです。

早く行きます。

なんだか怖いところです。

右に曲がります。



まっすぐ行きます。

右に曲がろうと思ったのですが、信号がありません。

トラックばかり走ってきます。

ずーっと先に信号が見えます。

しかし、しばらく待ったら車がいなくなったので道路を渡ります。

セメントの工場があります。

神奈川臨海鉄道のふみきを渡ります。

大きな工場があります。

このあたり京浜臨海部（京浜工業地帯）は「かながわ未来遺産

一〇〇」に選ばれています。

またふみきを渡ります。

電車は走っているのでしょうか。

大きな工場が増えてきます。

ふみ切りです。

右にまがります。

高速道路の下を行きます。

工場ばかりです。

まっすぐ。

浮島橋を渡ります。

川崎浮島町は「かながわのまちなみ一〇〇選」に選ばれています。

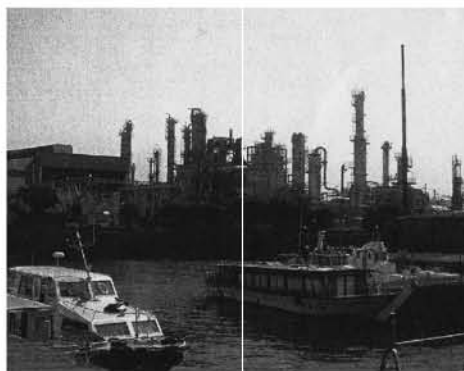
道がまっすぐで先が見えませんか。

線路の横を行きます。

工場！

まっすぐ！まっすぐ！

飛行機が飛んでいます。



暑い！休けい！

ガソリンスタンドの自動販売機で水のみます。

ガソリンスタンドの上に「かながわ最後のガソリンスタンド!!」

と書かれています。

まっすぐ！

そして！

道が行き止まりになりました。

ここが神奈川県の一歩のはじっこです。

着きました。

湯河原の千歳橋とここが神奈川のはじっこです。

とうとう着きました。

となりに浮島町公園があります。行ってみます。



東京湾アクアラインの建物が見えます。

羽田空港も見えます。

飛行機が見えます。

飛んでくる飛行機は大きく見えます。

かもめもとんでいます。

だーれもいません。

この公園に来る人はつりの人ぐらいと思います。

しばらく休めます。

とても静かなところです。





.....

さて今度は家を目指します。
もと来た道をもどります。

まっすぐまっすぐ...

少し行くと商店街になります。

川崎大師です。川崎大師は「かながわの
未来遺産一〇〇」「かながわのまちなみ一〇〇選」「かながわ
の建築物一〇〇選」に選ばれています。

京急大師線川崎大師駅の前を通ります。

大師通は「かながわの古道五〇

選」に選ばれています。

はしります。

小杉の標識があります。

旧東海道の碑があります。ここ

は富岡八幡宮から歩いてきたと

き通った所です。

まっすぐに行きます。

京急本線の下を通ります。

川崎市 幸区

川崎市 幸区

川崎市幸区になります。

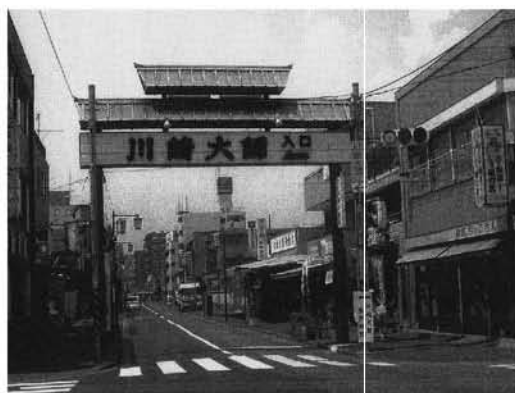
JRの下を通ります。

振り返るとJRの鉄橋が見えます。

多摩川の横を通ります。

まっすぐ進んで左に曲がります。

JR南武線鹿島田駅のところを通ります。



26

27

次にJR横須賀線新川崎駅のところを通ります。

佐原とか行くときはここから行きました。

鹿島田跨線橋を通りました。

坂を下ります。

右に曲がります。

ときどき行くバーミヤンがあります。

川崎市 中原区

いよいよ川崎市中原区です。

本月四の交差点です。ここは歩測の実験をしたところです。

東急東横線の下を通ります。

もうすぐです！

そして私の家が見えてきました！

28

目的地!!

とうとう到着です！

暑いです！

メーターを見ると二一四・二八kmに

なっています。

とうとう走りきりました。

長い長い道でした。

しかし全部走りました。

私の家に新しい自転車の仲間入りです。

私の家がスタート地点で、そして最後

の目的地です。

行きは二時間、帰りは六日間です。

よく走ったと思います。



著者からのメッセージ

「私は今、受験でとても忙しい毎日です。伊能忠敬をやっていた時がとても昔のように思えて、懐かしいです。神奈川県海岸線を走った時も暑かったですが、今年はずっと暑いので、長い間、私の研究レポートを載せていただき本当にありがとうございます。」



(いしやはるか)

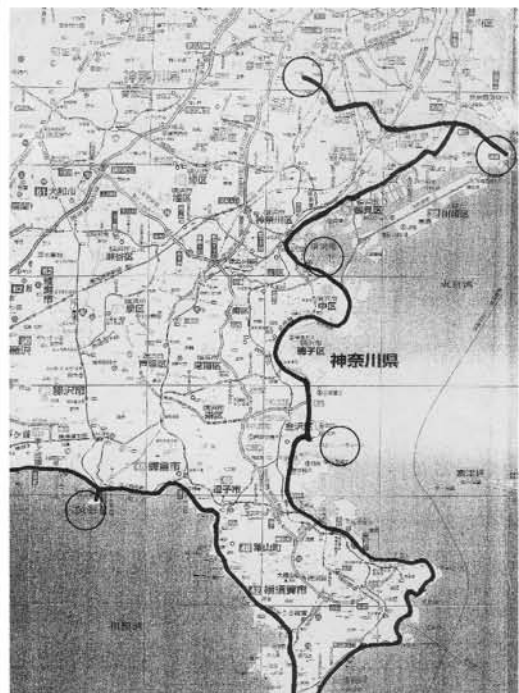
— 完 —

湯河原から家までの地図です。
広い地図で見るとなんだか近いように見えますが、一万分の一の地図ですと見るとやっぱり遠いです。
地図には道はでていますが、上り坂、暑さ、車のことはでていません。

最後に結論！
伊能忠敬のまねはぜつたいできません。



二一四・八一kmは東京から日本海まで行ってしまいます。
私の家からだとバスケット部の夏合宿のあった新潟県魚沼市まで行ってしまう。
まだまだ走れますがもういいです…



各地のニュース・

お知らせ

伊能忠敬の遺品を寄贈しました

藤岡健夫

既に本誌二〇一一年五月発行の特集号、第61号で紹介のありました伊能忠敬の遺品四点(①長女妙薫への年賀状②忠敬宛江川太郎左衛門英毅からの書状③忠敬所蔵の算盤④伊豆稲取岬付近の下図)を去る七月一〇日に香取市宇井市長に寄贈致しました。寄贈を申し入れた直後に今回の大震災で忠敬旧宅や香取市街も大きく被災し寄贈が遅れておりました。これらの遺品は私の祖母、母が伊能家出身で伊能家から譲り受け私の手元に残されましたが、私が一〇年前に寄贈しました九州大図が昨年国宝に指定され改めてその重要さを知り、一方で社会の少子化と独身者の増加を考えてこのような大切な遺品を個人が保存してゆくのは今後困難と思い、家族とも相談して残る遺品全部を忠敬ゆかりの香取市に寄贈して記念館で大事に保存して折々見学者の皆様に見て頂ければ幸いと思いました。これまで家宝として守ってきた祖父母、両親も喜ぶことと思います。

お詫びと訂正

本誌第61号9頁所収の藤岡家旧蔵文書写真に手違いがありました。(最上段)の位置に「妙薫宛書状」が入り、「妙薫宛書状」が重複しています。深くお詫びいたします。「江川太郎左衛門宛書状」については、「伊能忠敬関係資料国宝指定記念・伊能忠敬研究会十五周年・記念誌」をご参照下さい。(編集部)

理事会報告

七月二十四日(日)午後、パークコート神宮前会議室にて二〇一〇年度の理事会を開催しました。出席理事は、渡辺・星埜・伊能洋・柏木・前田・鈴木、加えて清水監事。

議事は二〇一〇年度活動報告および二〇一一年度事業計画(案)、二〇一〇年度収支報告および二〇一一年度予算(案)、役員改選でした。(新役員は別記のとおりです)。

二〇一〇年度は総会、「確かな一歩」発表、国宝指定・研究会15周年記念祝賀会の開催、会誌第60号および記念特集号発行、フロア展の進行など、新年度はフロア展の継続、例会二回(第一回は九月十一日(日))、見学旅行(来春?検討中)を予定、会誌の充実とカラー化、会員の増加をはかることを決定。総会は、当初の予定どおり、記念祝賀会との関係で一年休止とすることを確認しました。

収支については清水監事より確認の報告がありました。会員数の漸減のため会費収入が減り、活動費不足なので、フロア展会場での呼びかけなどを通じて会員増加をはかります。会員各位からも周囲に呼びかけを、よろしく願います。

会員増には、雑誌の充実が必要です。高安克巳編集長のもと、新役員中心の編集委員会体制を決めました。

八月三日(水)午後、渋谷区神宮前区民会館で、二〇一一年度第一回理事会兼編集委員会を開催し、前期理事会の活動計画の実施を確認しました。

(鈴木)

●伊能忠敬研究会役員名簿(二〇一一年七月二四日開催の理事会で決定)

名誉代表・理事 渡辺 一郎

代表理事 星埜 由尚

理事 伊能 敏雄 (総務担当)

理事 香取 洋良 (香取支部長)

理事 新沢 純子 (事務局長)

理事 鈴木 義博 (事務局長)

理事 高宮 勲 (調査研究・編集担当)

理事 高安 克己 (編集担当)

理事 宮内 敏 (編集担当)

監事 清水 靖夫

顧問 柏木 隆雄

顧問 齋藤 幸子

顧問 前田 仁

幹事 石川 清一 (九州支部長)

幹事 木谷 道宣 (フロア展担当)

幹事 小林 一三 (新潟支部長)

幹事 坂本 巍 (ホームページ・資料室担当)

幹事 野田 茂生 (九州支部長)

幹事 原田 照男 (関西支部長)

幹事 堀野 正勝 (フロア展担当)

幹事 松宮 輝明 (東北支部長)

二〇一一年度 第一回例会のお知らせ

九月十一日(日) 一四時より

パークコート神宮前1階会議室

テーマ「伊能測量を受け入れた地元記録の読み方―尾鷲の土井家文書を例として」渡辺一郎(会場)不明の方は鈴木までご連絡下さい。また会報62号を御持参下さい。

伊能忠敬史跡紹介

伊能忠敬小倉頭彰碑建立十周年

記念献花式が、六月四日、常盤橋際の記念碑前で挙行されました。伊能測量隊に扮した顕彰会一行が常盤橋を渡って会場に到着すると、小倉頭彰会会長で、本会会員 穂吉（あきよし）正明氏の式辞ではじまり、出席した北橋健治市長の祝辞と渡辺名誉代表の祝辞があり、伊能家七代目伊能洋さんのメッセージが披露されました。

ついで、参加者全員がひとりづつ献花。そして、十年前に小中学生、一般人が埋納したメッセージを取り出され、会場を井筒屋ホールに移して、星埜代表理事の講演と、メッセージの披露がおこなわれました。当時の小学生数十人が登壇、すばらしい成長に目を見張りました。

(W)

伊能忠敬小倉頭彰会 御中

本日は小倉・伊能忠敬記念碑建立十周年記念祝典の開催、心よりお慶び申し上げます。思い起こせば十年前の建立記念式には妻陽子ともどもお招き頂き、参列させていただきましたことが昨日のことのように浮かんて参ります。この長い年月、毎年「献花の集い」を催され、忠敬の事跡の顕彰、記念碑の保持という地道な活動を続けてこられた小倉頭彰会の御努力、地元の皆様のお力添えに深い敬意と感謝を申し上げます。本日の催しには何を置いても参加したかったです。ですが、万止むを得ぬ事情で欠席しますことをお許し下さい。加えて妻陽子も今日の日とタイムカプセルの開蓋を指折り数えて楽しみにしておりましたが、思いもかけず昨年急逝いたしました。それも叶わぬ夢となりました。何よりも本人が残念がっておりましよう。今後ともこの催しが盛大に続いて行かれますよう心から願ひ、関係者の皆様のご健勝を切に祈念してお祝いのご挨拶いたします。

風薫る一昔経し忠敬碑

洋

二〇一一年六月四日

伊能 洋

松山「史跡 伊能忠敬休息之地」

伊能 洋

平成二〇年六月、愛媛県松山市谷町の一画にあった木製の標柱「史跡伊能忠敬休息之地」が、松山市潮見公民館・同谷町町内会により、同じ表示の石造記念碑として一新されました。

松山の石川朋重さんから、この貴重な報告をいただいたのは、実は昨年の二月のことでした。たまたま妻陽子の急逝から間もない時で、当時の私は毎日毎日を生きることで精一杯であり、石川さんには受取りも差し上げず大変な失礼を致しました。遅ればせながら、忠敬研究62号に記録させて頂いて、お詫びを申し上げたいと思います。御海容いただければ幸いです。

なお、松山は陽子が大好きだった土地の一つで、昨年の正月も「今年、もう一度行きましょう」と楽しみにしていました。彼女がまだ居りましたら、まっ先にこの記念碑に駆け付けたに違いありません。



伊能忠敬が谷村を訪れる

忠敬が幕府の命を受け、全国地図を作るための四国や奥羽の海岸の街道を測量しながら、谷村を訪れたのは今から約二百年前。八〇八（文化九年八月）六日、忠敬六十四歳のときであった。

忠敬が谷村、大内平田村の測量の途中休息されたと思われる場所は、津草寺の山門より東へ田の所、旧公会堂（集会所）現在の倉庫、倉庫のある所と思われる。

当時、日本は鎖国をしていたが、蝦夷地や樺太、千島などの周辺にロシア人の集結が著しくなり、北方の事情が俄かに騒がしくなった頃のことであった。

忠敬は千午一（一度）の長さで、八・甲（一・〇七五km）と算出したが、この値は、今日の測量値と比べて僅か、〇・〇〇分の、余りの誤差しかない正確なものであった。忠敬は素直らしい知識と技術をもっていた。

忠敬の測量隊は総勢十八人で、忠敬は船腹で伊予の国に入ったが、宇和島藩は接待小屋四軒を新築し、測量船や食料運搬船など船六十四隻と水士四三〇人を用意して前毛湾に迎えた。測量に当たっては村役人や人夫等、二〇〇人を動員した。

西条藩は忠敬親子、下段、内弟子、若党、小者の宿舎を用意し、休養日や昼食などにも細心の準備をし、昼は汁・菜、夜は汁・五穀、別に夜食や菓子なども用意し、夜は寝ずの番がつき、医師も前泊させていた。

このように各藩は幕府の命を受けて測量する忠敬に対して最大の協力と最高の接待で迎えたという記録が残っている。

その昔、首原道貞公が谷村の天神山でをすして休息されたところから、後世の村人たちが大講堂を建てて忠敬するようにしたが、この度の伊能忠敬の谷村への訪れは、首原道貞公についで、まさに谷村の文化遺産として貴重なものといえる。

文責 山口 博幸



記念碑の説明板



会員便り

山本 公之(小平市) 三千葉工大の巡回フロア展に行ってきました。雨の中御用の旗が見え、案内されている学生さんが御苦労様でした。また、「忠敬大分を測る」にも昨秋出掛けました。日帰りに近い日程だったので、心残りです。これからも各地へ参りたいと存じます。

河西 浩(甲府市) 十五周年研究会が無事盛会に終えられ良かったです。佐原の宿に一泊してと思いきや大雪で足をうばわれ、さらに原発事故で彼の地にはいつ行けるか課題も多いです。今春より教育出版の国語で忠敬さんが伝記で取り上げられています。従来にない大変詳しい読物になっていますので、一度六年生の教科書をお孫さんと御一読ください。

川上 清(水戸市) 一〇年前の伊能ウオークの再現をさらに発展させた「健やか奥やかウオーク日本1800 歩いてニッポンを元気に」茨城県四十四市町村完歩者が今年中にしようです。成家 淑子(香取市) 伊能家旧宅の復興・佐原の街並みの復興が早く進められたいと願っています。秋間 実(逗子市) 大震災のことで重い気分をかかえてすごしています。しかし、読み書きはなんとか続けています。



新会員紹介

石川県支部 河崎倫代

昨年十月、金沢工業大学で開催された「完全復元伊能図全国巡回フロア展」へ来てくれた相良文昭さんと江波浩行さんが、伊能忠敬研究会に入会の意志を示し、相良さんは正式に入会しました。江波さんはしばらくは石川県支部の準会員として関わりたいとのことでした。これからも、小・中・高の教科書に登場し続けるであろう「伊能忠敬」が、石川県内に

三十七泊も滞在し測量を行ったこと、沿岸の村々から大勢の手伝い人足が出て測量作業を支えたことなど、もともと多くの県民に知ってもらいたい。そんな思いが、若い二人の参加で実現できそうです。全国の会員の皆さま、どうぞよろしくお願い致します。

★相良文昭さん

はじめまして、相良文昭と申します。平成二十二年十月に金沢で開催された復元伊能図の展示会に伺ったことをきっかけに、平成二十三年三月の羽咋市の探訪に同行致しました。伊能忠敬の一行が、測量の際に、邑知湯を確認した時の山裾と思われる場所に行くことから始まり、その場所が邑知湯が実際に確認できるか眺望しましたが、建物と天候の悪さのせいで確認しにくかったです。ただ、当時の建物は現在より低いだろうし、また当時の人々の方が視力もよかったです。その当時の十分は邑知湯を確認できたのではないかとこの感想を持ちました。次に、旧道などを通して伊能図に書かれていた地名の箇所を巡り、真館家へ行きましたが、このような経験がありませんでしたので刺激になりました。



全国巡回フロア会場での相良君(右)と江波君(左)

した。今後は、伊能図に書かれている石川県の他の地名の箇所や、その周辺にある寺社・遺跡などを巡ってみたいと思っています。

★江波浩行さん

二〇一〇年十月、金沢工業大学で開かれた、完全復元伊能図全国巡回フロア展に立ち寄りしました。会場はたくさんのお客さんで、河崎先生がおられました。私の日本史の先生であります。再会のご挨拶をしたところ、伊能忠敬研究会石川県支部として参加されているとお聞きしました。その時、初めて研究会の存在を知りました。私としては、小学生の頃、卒業制作に伊能忠敬を取り上げたことがあり、何かできることがあれば参加してみたい旨をお伝えしました。

二〇一一年冬、初めて石川県支部のミーティングに参加しました。私はITによる活動支援を提案しました。この時、忠敬と石川県の接点を教えていただきました。

今春、石川県支部として「伊能忠敬測量隊、羽咋を測る」を催し、参加させていただきました。調査など、体験しました。その昔、忠敬が歩いた道を今の自分達が辿る。九十九里浜に生まれた忠敬が、石川県に住む自分達にも知らない道を教えてくれるようで、ちょっとしたタイムマシン感覚があり面白く感じました。また、測量隊に出された献立も、興味深いと思います。各地域の風土が表れていて、当時の日本の食文化や四季折々の旬や環境などを辿る上でも貴重な記録だと考えます。忠敬は実にたくさんの顔があり魅力的です。まだ私はその入口を垣間見たところかなと思っています。これまでも多くの人々を魅了してきた忠敬に、今後も触れられたらと思っています。

国宝指定記念
伊能忠敬基本史料の初公開!

伊能忠敬測量日記 原文



「伊能忠敬測量日記」清書本28冊
の原文(見開き約1,500面、
3,000頁分)を、データ化

発行日 2011年 9月 1日
制作 伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会
監修 渡辺一郎(伊能忠敬研究会名誉代表)
価格 ¥21,000(税別)
発売所 〒269-1318 千葉県山武市寺崎548 戸村 茂昭
E-mail info@inopedia.jp

伊能忠敬と伊能図の大事典
<http://www.inopedia.jp>

伊能忠敬日記(原文)のDVD発売!

伊能忠敬研究会会員に特価提供! 渡辺 一郎

ここに述べるような趣旨で伊能忠敬測量日記原文のDVDを発売します。ついでに、伊能忠敬研究会会員に限り一〇、〇〇〇円の特価で提供したいと考えます。御希望の方は渡辺までお申し込みください。入金次第、発送担当からお送りします。(振込先 三菱東京UFJ銀行 春日町支店(店番063) 名義人 渡辺一郎 普通1046833 ただし、期間は二〇一一年一二月末まで。お一人一点に限らせていただきます)

いまから約二一〇年前、五五歳の伊能忠敬は、深川の富岡八幡宮から日本全国測量の旅に出発しましたが、第一次の蝦夷地測量から第九次の伊豆七島・江戸近郊測量まで三、六六二日の旅の経過を、毎日克明に日記に記しました。測量しながら現場で書いた伊能忠敬先生日記五十一冊と、のちに清書した伊能忠敬測量日記二八冊の二種類の日記が香取市の伊能忠敬記念館

めることにより、先人伊能忠敬の息吹きを直かに感じてほしいと思います。

DVDの中身をご紹介しましょう。最初の画面で右側のボタンをクリックすると解説、目次、測量図年譜、クレジットなどにジャンプすることが出来ます。まず目次をクリックしましょう。ついで、測量回数または測量日記巻数を選びますと詳細な索引が開きます。

索引頁では、旧暦と陽暦による年月日、宿泊地名がでていますので、この中から閲覧したい地域の巻数・頁をクリックしてください。日記の画面が登場します。日記画面では、頁送り、印刷などをボタンの操作でおこなうことが出来ます。参考資料として測量ルート図と伊能忠敬関連のかなり詳しい年譜を添付しました。御参考にしてください。このDVDの特徴は、①伊能忠敬測量日記そのまのデジタル本として初めての刊行という点です。②測量目録一覧表から容易に読みたい部分が検索できることです。膨大な日記から必要な部分を検索するのは大仕事でしたが、本DVDでは探す場所が分

に伝えられております。いずれも二〇一〇年六月国宝に指定されました。このDVDは清書本測量日記二八冊、約三、〇〇〇頁をそのままDVD化したものです。あまりに膨大なため、これまでに刊行が難しかったのですが、ITの進歩でデジタル化が可能になりました。測量日記は、毎日の業務終了後に、忠敬自身が認めたもので、特に清書本は、後世への報告書として残すために、態々制作されたものと考えられます。

古文书としては、分かりやすく、丁寧に記されています。本書を読み進めれば簡単に索引できます。また、③すべてDVD一枚に入っていますから、場所をとらないで、伊能忠敬の日記二八冊を座右に備えることができるのもメリットの一つと考えます。クレジットを最後に記しておきます。測量日記影印本の出版は、三〇年以上前に、天文研究家・青木源四郎氏のもとで企画され、撮影もおこなわれました。しかしながら、余りにも浩瀚であるため、一部分の私家本制作にとどまりました。井上ひさしさんもこの私家本を利用していました。資料は伊能忠敬研究会発足にあたり、渡辺一郎に引き継がれましたが、ITの進歩と、伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会・イノベディア同人の献身的協力により、DVDとして陽の目を見ることになりました。伊能忠敬研究進展のため、心から喜んでおります。なお、本DVDの収益はすべて伊能忠敬顕彰活動の経費に充てるものであることを申し添えます。

クレジット
定価 二〇、〇〇〇円

編著 渡辺一郎(伊能忠敬研究会名誉代表)
刊行 二〇一一年九月一日

企画・製作者
ディレクタ 横溝 高一
画像処理 竹村 基
デザイン 中根 浩也

発行者
伊能忠敬と伊能図の大事典イノベディアをつくる会(会長 渡辺一郎)

事務局所在地
〒269-1318
千葉県山武市寺崎五四八 戸村茂昭方
info@inopedia.jp

*このDVDに収録されているデータは、著作権法により保護されており、無断で転載・複製することはできません。御注意:このDVDはパソコン(ウィンドウズに限る。マックには未対応)で見るものです。デジタルTVでは読むことは出来ません。不明な点は事務局にお問い合わせください。

伊能忠敬研究会 御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
- 二、つぎのような活動を行っております。
 - ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年四回発行
 - ②例会・見学会の開催
 - ③忠敬関連イベントの主催または共催
 - ④その他付帯する事業
- 三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門・趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-16
日本地図センター2F 伊能忠敬研究会
電話・FAX 03-3466-9752
事務局メール inouken@ae.aone-net.jp
郵便振替口座 00150-600728610

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。

一回の掲載は原則として刷上り6頁迄(刷上り一頁は四〇〇字原稿用紙で約四枚)です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。

原稿は原則としてCDやメール添付など電子媒体でお送り下さい。手書き原稿の場合はご相談下さい。

テキスト(本文)はマイクロソフト・ワードなどの標準的なソフトのフォーマットを用いてファイル化してください。

カラー版のメリットを生かした写真・図版を歓迎します。ファイルはPcまたはフォトショップのpsd形式で、印刷サイズで三五〇dpi程度の解像度のものをご用意下さい。プリントアウトした鮮明な写真・図版でも受け付けます。

話題、情報、近況などの原稿・お便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「伊能研究会」公式ホームページ
<http://inoh-tadtaka.org/> (休止中)

○「InoPedia (イノペディア)」…伊能忠敬と伊能図の大事典
<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料
<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamoto/>

○「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料
<http://www.tl.rim.or.jp/~koko>

編集後記

◇研究会に入会して一年少々の私が、会誌の編集を担当することになり、とまどいを禁じ得ません。経験豊かな諸先輩方にアドバイスをいただきながら、会員の皆様の研究や活動をしつかりと記録し、研究会の発展に微力ながらお役に立てれば、と思っておりますのでよろしくお願いいたします。◇さて、すでにお気づきのようですが本誌はこの号からカラー化しました。カラフルな伊能図や多様な史料を詳細に紹介したり、関連する地図や地点の写真とカラーで掲載することによって、そこから得られる情報は格段と精緻なものになっていくと思われまふ。◇最近の技術的進歩によって、皆さんからいただいた電子原稿をコンピュータとらめっこをしながら編集し、それを印刷屋さんへ送れば数日の内に雑誌が手元に届く仕組みになっています。◇安価で自由度がある代わりに、投稿者も編集者もそれなりの手間と頭の切り替えが必要となります。◇しばらくは従来の編集スタイルを引き継ぎながら、カラー化、電子化のメリットを最大限に生かせるような、新しいデザインの雑誌に変えていくことを模索していきたいと思ひます。◇会員の皆様からも、カラーに映えるすばらしい写真や原稿とともに、本誌についての忌憚のないご意見をお寄せ下さい。(T)